特集■続・これでいいのかピンク映画——

独立プロよもっと誇りを持て！

おんな考現学

嘘

女は自分に日々のパンを与えてくれる男をひきつけておくために嘘をつくのだ。

接吻

愛の有料道路の入口、運転手は男、それが多く深く熱くなるにつれ料金がかさむ。

乳房

男がそれに憧れるのは母親への甘えだ。ボリュームがあり過ぎてはモタれる。

雪の中の熱演

《ロケだより》「狙う」（葵映画）の香取環

撮影合い間に暖をとる香取環

↑文字通り体当たり演技を見せる香取　環

厳冬の雪の中でスリップ一枚のからみを演ずる香取 環と鶴岡八郎→

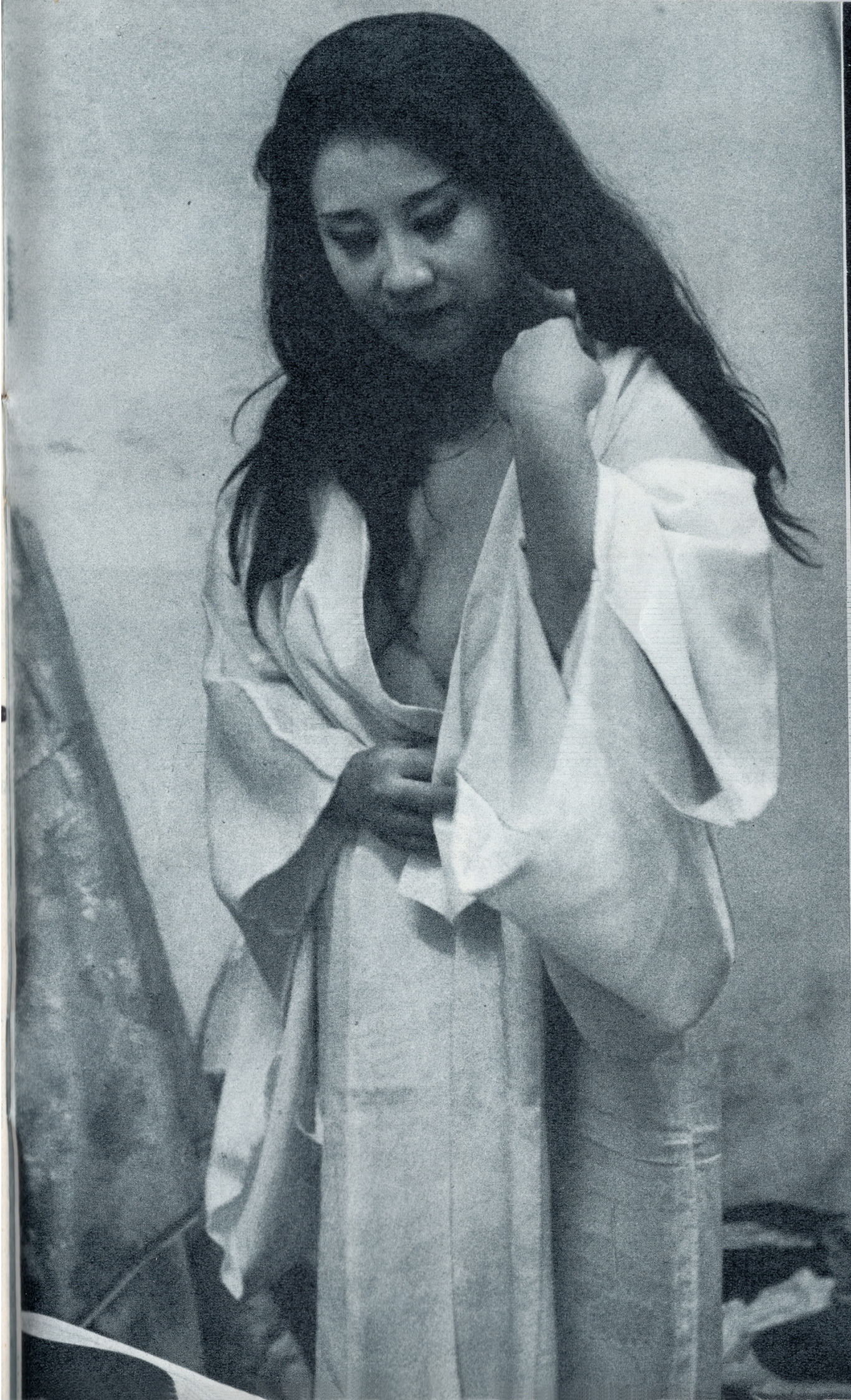
雪はとかく絵になるものだ。白銀一色の雪原をバックにドラマを展開させようという映画はこれまでいくつかあった。

葵映画の「狙う」（監督西原儀一）もその雪を最大限に生かして福島県飯坂温泉の奥でロケを行なった。

大金を横取りした三人の男と一人の女、欲と色がからんで、殺し合い、果ては女の謀略にかかって三人の男が自滅するというストーリーだが、月並みなドラマに少しでも新味をそえようーと、かくなる雪中撮影と相成った。

脂肪がやや多い香取環といえども、雪の中の愛欲シーンにはかなりこたえたらしくブルブルの連続。女優はハダカが売りものだけに割りのあわないことになる。まあこの勇ましい雪と取り組む香取りの熱演は買ってやるべきだろう。

看板に偽りあり

〈実演・源氏(裸)物語〉で出し惜しみした松井康子

成人映画 NO. 15

昭和42年2月1日発行

目次

表紙—山吹ゆかり

発行／現代工房

この正月興行はどこも実演つきがにぎやかだった。成人映画専門館ばかりではない。東京都内の主要な五社系映画館、劇場はこれをハデにやった。そして興収をあげた。

池袋名画座では正月四日から十日まで、〝松井康子とそのグループ〟という出演陣で、「源氏裸物語」（演出小林悟）を上演した。一日三回、四十五分の実演だが、コミカルな味で客席を湧かした。この実演で最高が千五百人、平均八百人というヒットをとばして館主側も、出演陣も大よろこび。

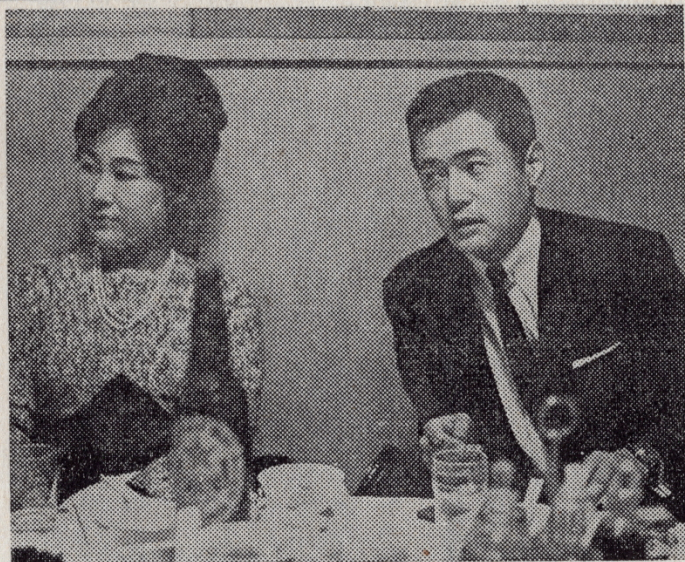
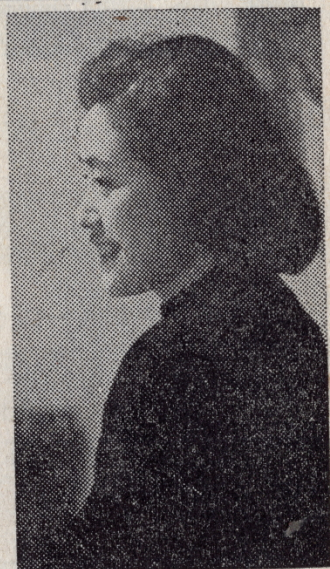
光源氏（白川晶雄）が松井康子ら数名の女性に大いにモテるのだが、実はそれがニセものだったというストーリー。松井をのぞく女優陣はオッパイ丸出しで、舞台で大ハッスル、同性愛ベッド・シーンの凄さに生ツバをのむ観客もあってかなりセクシーなムードを場内に発散させた。

残念なのは舞台が狭まいこと、舞台の背景や美術、小道具が貧弱だったことなどがあげられる。

それでも衣裳はTBSテレビで市川崑監督が演出した「源氏物語」で使った衣裳を借りて使い、豪華なスタイルであった。ただ残念なのは看板の〝マルハダカ〟にそむくんじやないか！という声もきかれた。

（写真は楽屋で出を待つ松井康子）

もっと誇りを持て！

・続これでいいのか！ ピンク映画

城山路子 ・ 野上正義　美矢かほる ・ 川島のぶ子

ピンク映画だからという安易な妥協は許せない！

本誌　前回の監督座談会はおかげさまで大好評でした。ある俳優から監督ばかり好き勝手なことばかりいって一方的だ。われわれにもいいたいことがいっぱいある。独立プロを向上させるにはみんなで意見を述べて是正し、努力してゆこう…そんな声が多かったので、きょうは俳優さんを囲んで、不満やら裏話を大いにやっていただきたいわけです。まず、改めてほしい、よくしてほしいという不満をのべて下さい。

野上　ボクはまず企画。もっと考えてほしい。ラブシーンだけの映画だけじゃ困るということです。

谷口　シナリオはもっといいものを書いてほしい。

里見　ボクは五社と比較して考えてはいけない。独立プロの人たちは強いですね。耐久力、可能性もある。

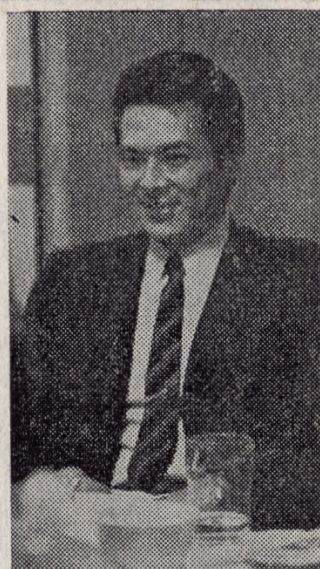
城山　自由にものを作れるという可能性を求めて、私もこの世界に飛び込んだんだけど、きょ年二、三回裏切られたんです。それでいま仕事もセーブしてますが、それをどうやって乗り越えたらいいかと悩んでいるわけなのよ。まだ納得してませんけど。

野上　一昨年あたりはまだ可能性がありましたよね。最近は権力、金の力、そうした社会の裏を知らさせて考えますね。とてもいやだ。力関係がみにくいですよ。

城山　俳優の立場を主張し納得できるものをやるべきですね。抵抗を感じいやなものはたとえ芥川、直木賞作品だ

独立プロよ

特集＊俳優による噛みつき座談会

■出席者―新高恵子　・　谷口朱里　・　里見孝二

監督の噛みつき座談会「これでいいのか！ピンク映画」につづいてのスターのかみつき座談会をおくります。

延々三時間にわたるいいたい放題をぶちまけて、一同なにやらホッとした開放感にひたった表情でした。

ってやるべきじゃないわ。私は一年に一本しか仕事ができなくてもいい、もしなかったらそれでおしまいになってもかまわないわ。

（新高がここで出席）

美矢　私はなんにも知らないでこの世界に入って、育てられました。でもいろいろ見聞していわれた通りになんでも無批判にやってはいけないと思いますね。

野上　それと男性映画がないということ。もっとふやしてほしい。映画館主の注文を必要以上に聞き過ぎる傾向にありますね。

里見　関係者からきょ年はいいものもあったけど、下らないものが多かったといわれた。そう思う。俳優は役を与えられてただそれをやるだけじゃいけない。われわれはより以上の教養とプライドが必要だと思うんですよ。本数を減らして、コクのあるものをやること、さらにラブ・シーンもコクのあるものが大切ですね。芝居もうまくなりたい

野上　たとえば三国連太郎を出演させることのできるような作品を作れ！　といいたい。その時ボクは仕出しでもいいですよ。

本誌　この間も可能かず子さんがきて、仕事していて監督にいつもOK出されて、徹底的に泣かされたことない―というのよ。その反面もう可能さんにいくら演技を要求しても出てくるものがないから―という妥協もあるんじゃな

さまざまな話題の中に一貫して流れているものはみんなが映画を愛しているということ―こうした人たちのいる限り映画は亡びないでしょう。しかしそれに甘んじている映画製作者は大きく目を開き、前向きに前進するべきです。

いのかしら。

城山 それはきびしいわ。

谷口 そういってましたね。もうピンク映画からなんにもとるものがないから退める―といっていたけど、彼女はピンク映画で育てられたのだからそんな退め方ってないと思うのよ。

本誌 シナリオについてのデスカッションはあまりなされないのじゃないですか。

新高 キチンとしたコンテを立てて撮影をはじめる監督さんが何人いるかですね。映画は演出家次第、いい監督さんであれば、役者は素人だって出来るし、現にそうしたケースもあるでしょ。役者にあれこれいわせない監督が少ないから、いつもわたくしたちが泣くことになるわけよ。

城山 ときどき撮影現場でシナリオがかわり、紙キレを急に渡されることがありますね。ひどいですね。

谷口 それは監督が俳優を認めていないからそういうことやるんじゃないのかしら。

城山路子さん

新高 監督と俳優のぶっつかり合いがないのね。それを歓迎する監督さんがほしいわ。大ていは時間のロスだ、めんどうくさい―ですね。

城山 台本もらって翌日クランク・インってのが多いですね。準備ができないしこれもやめてほしいわ。

新高 映画がマンネリになっているのも監督に独創性がないからよ。

野上 模倣が多いですね。

里見孝二さん

保障もない俳優たちの生活に演技の幅はでない

本誌 ギャラの面なんかどうですか。いま主役で十万円もらう人いますか。

一同 いませんねえ。

野上　いまの倍だったらもっとアクセクしないで仕事をやれますね。勉強もできる。

本誌　おまけに衣裳代が半分かかってはなんにもなりませんね。

新高　それに健康管理ね。

本誌　ギャラアップする運動はみんなで協力しなけあいけませんね。

谷口　それとギャラの点で、わたくしたちに悪影響をおよぼしているのはマネージャーよ。

本誌　マネージャーをおいてやる必要もないし、それほどの立場じゃないじゃないですか。

谷口　最近、女優さんが退めてゆくのはあるマネージャーのせいもあるのよ。

城山　ギャラもらったって衣裳代にかかっちゃうでしょ。私は一作品で五着ぐらい着物買うことだってあるのよ。赤字だわ。

野上　ボクは二十数本の作品で同じセビロで出てますよ。男の場合はあまり変りばえしないからいいようなもんだけど、国映や葵映画や日本シネマの作品に同じセビロで出ているとやはり考えますね。

上半身を撮るのになぜ全裸を要求するのか！

本誌　衣裳が俳優持ちという現実、それをみんなが批判もなしにやっていること。これは改めるべきじゃないかしら。製作者や監督がそれがあたり前のことだと思っている。そのくせ俳優たちが衣裳代がかかって大変だ！と嘆いている。こんなことってないんじゃないかしら。五社もテレビも演劇も俳優が自分のお金で衣裳作っているところはありませんよ。独立プロの世界だけですよ。

里見　本当にそうですね。以前はボクらにクリーニング代五千円位いは出てたんです

本誌　新しく作るのが大変なら貸衣裳だっていいわけでしょ。それもやらずに映画作っている目的はハッキリしてますよ。つまり脱ぐということですよ。ではこの辺でウラ話など、少しやわらかい方に話題かえて、野上ちゃんなんかベッドシーンやっていて感じる？

野上　ありますよね。生きものだから。中には意地の悪い女優さんもいますからね。

城山　感じちゃうなんてのはないわね。

新高　ある主役の人でいたわよ。

野上　誰だ？　ここにいない人だな。

本誌　シャワーシーンとか入浴シーンで五社系の女優さんはきまって水着かバスタオルを使ってるけど、ピンク系の女優さんはオールヌードになるでしょ。

新高　私は上しか撮らないときは必らずパンティはいてます。部分をとるのになにも全裸になることないもン。

本誌　しかし部分だけを撮るのに全裸にする監督も多いじゃないの。

城山　楽しんでるんじゃないですか。

谷口　それとね、脱ぐことでやる気がある—とか根性あるなんていわれてますけどねそれはおかしいわ。

新高　無条件で脱げるだけの監督さんたちが何人いるでしょうか—といいたいわ。

本誌　必然性のあるハダカ

のベナリオをもってきて下さい―ということになるわね。

新高　話がさきのやわらかい方にもどるけど、私ラブシーンで物凄く燃えたことってゴク僅かよ。撮影のたんびに燃えることはないわね。

城山　それあ、スタッフの衆人監視の中で燃えられっこないわよ、みんな見てるとこでなんで気分だせるもんですか。

エクスタシーの表情は経験者しかできない？

新高　物凄くホン（台本）がよくって相手が自分の好みに合ったときコウフンするときはあるわ。役柄に気分が乗っているとき。それは否定できないわね。

城山　相手がおじいさんで口が締らなくなっているような相手ね。そんな人とラブ・シーンやるときは唇あわせることもイヤねえ。

野上　ボクは城山さんとラブ・シーンやったけど〃あんた下手ねえ〃なんていわれてやっとOKになってほめられたことあったな。〃あんたうまくなったわねえ〃だって…。

本誌　エクスタシーだけど女優が目を閉じてのクライマックスの表情があるでしょそして声を出すでしょ。あれは女の人しか出来ない演技だけど、あの時の演技はやはり経験がものをいうことになるんですか。

新高　エクスタシーの表情を教えていただいたのは一作ごとの監督と他の人がやった演技を参考にしてるわけよ。

本誌　しかしあの表情演技は一つの経験じゃないのかしら。何分の一かのものが演技に現われてくると思うけど。

城山　それはね。男の人の経験じゃないの。監督が経験したものとかイメージーを女優に要求するんだと思うのよ。

野上　ボクはそういうカオをしてもらいたいなあーという願いじゃないかしら。

（ここら辺にくるとお互いの意見もキャアキャアとまるで騒音と化す。発言がほとんどききとれないくらい）

本誌　しかし観客としてはたとえば新高さんがエクスタシー演技をやると、きっとあの女優は実際のベッドのときもあんな表情で……といろんな想像すると思いますよ。

谷口　その時はあんなカオ絶対しないわ。

（カンカンガクガクでききとれず）

美矢　ナマのものをそのままズバリやれるわけないわ。絶対に変形ですよ。

新高　演技してて男性（監督）がOKするんだから真実性はあるんでしょうね。

谷口　しかしあれは一番オーバーな表現方法じゃないかしら……。

本誌　オーバーもいいところね。女性はオッパイを出してパンティをはき、男がズボンをはいてのベッド・シーンで、どうして女性があんなエクスタシーの声と演技をさもリアルに表現しなければならないのか、虚構もいいところじゃないですか。

野上　女の人の脚に男の顔がいったりしてね。

新高　ウソだから映倫がOKしてるんでしょ。でもみてる観客としてはバカにするな！というところでしょう。

野上　しかし独立プロもそろそろエロ場面専門の映画じ

ゃなく、もっと高度な内容のものに高めていってほしいですね。

脱ぐことには抵抗感じないが、必然性がほしい……

本誌　脱ぐこと、脱がされることについて女優さんたちどう考えていますか。

谷口　私は絶対イヤ、まだ抵抗感じてる。

新高　私たちは脱ぐことに抵抗してるんじゃなく、脱ぐ必然性のないドラマがあまりにも多いってことよね。脱ぐための映画じゃなく、脱ぐ意味の高いものを求めているってことです。

野上　スェーデン映画やフランス映画のスターが脱ぐと世界的な大スターになって日本の女優が脱ぐとパーだしね。

谷口　企画の貧困よ。

新高　ピンク映画を一体どんな方がみてると思う？　みんないわないだけなのよ。

野上　それは幅広いですね。上は大学教授、サラリーマンからですよ。

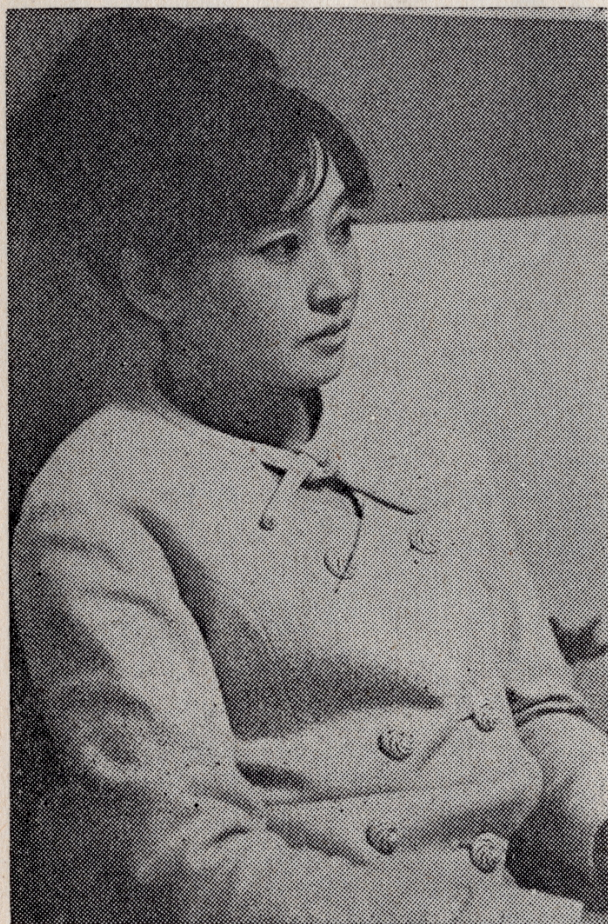
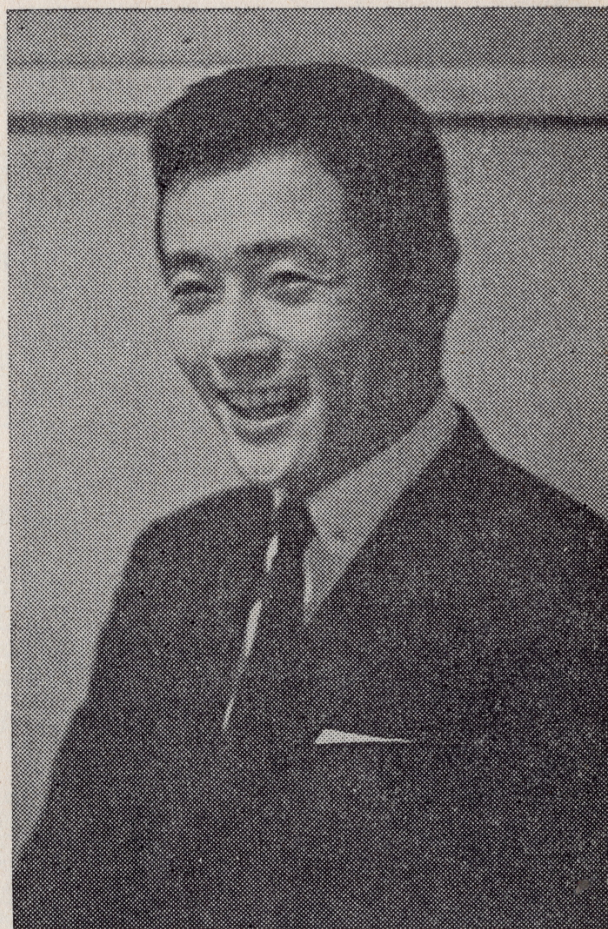
新高　あるかなりの地位の人にあったら、実はいわなかったが、全部あんたの映画みてますよーといってました。

野上　ボクは残念なことは女性の観客が少ないということですね。

新高　それは変なイメージと先入観を与えているからよ。

本誌　それは男性が悪いんじゃない？女性にたまには成人映画でもみようじゃないか……というウイットがあっていいのよ。

野上　ある映画館の前でみてたらね、ためらっていた若い連中が、あとからきて入場

谷口朱里さん

新高恵子さん

野上正義さん

券買った人につれられてドヤドヤと入ってましたよ。

新高　私ね、日本人はセックスというものは暗く恥べき行為だと思う現われじゃないかと思うの。もっと健康的に考えるべきよ。だから不健康な性の遊びがふえるのよ。それが影響してピンク映画を罪悪視しているわけなのよ。

本誌　いまだに製作者は一向に進歩していないし、古い物語りしか考えていない。内容が暗いものがいいんだと考えている。

新高　製作者と興行者側が観客を逆に引っぱってゆくものを作るべきなのよ。

谷口　配給会社もマスコミにプライドを持ってやってほしいわ。監督も人の悪口いう前に自分を振りかえってもらいたいわ、若松監督にとくにそれをいいたい。

新高　そうなのよ。私たちは懸命なのよ。それを監督がお前はナマいきだ、役者じゃないと怒鳴られたらなんの進歩もないわね。

城山　それあ監督が理論的で俳優よりアタマいいわよ。でもね、わけても若松センセイみたいにお前はバカだ！といわれりゃ元も子もないわよね。だからいいたいことをいってジャンジャン書いてもらおうじゃないの。

野上　それと話は別だけど、男性映画をもっとふやせ！といいたい、きょうも男性が二人というのも実に寂しい、これは力関係だろうけどね。

私生活までもピンク女優という先入観で見られる

本誌　新高さん、この世界を退めるのが心残りじゃな

美矢かほるさん

い？

野上　新高さんをやめさせるような原因はほかにもまだいい女優がでてくるということだ。ここまで育ててきて退めさせる機構にいろいろと問題があらあなーです。

新高　私、個人としては一年半やってきて後悔はしていません。ほんとにやってよかったと思う。母を嘆かせないために退めるわけだけど、独立プロの世論に私が負けたということです。先入観に敗ぼくしたんです。しかしこの社会でいろんなこと学びました。仕事のきびしさとか…いろんな勉強できてプラスになりました。

里見　ボクも松竹にいたときは仕事は少ないし子供だったが、この世界で中心の仕事をするようになって深く考えさせられますね。外で特定の女性と関係があるでなし、真面目に家に帰るしね。態度とプライドをもっていますよ。そして独立プロがいまに世間から理解してもらえるときがいつかくるだろうという努力をつづけているんです。

城山　私なんか映画をやり水商売をやっているでしょ。なおさら態度をよくし、あの女は誰とでも寝るのかと思われるような生き方をしてはいけないと思うのよ。

野上　それとわれわれにもいいお客さんがふえている—ということね。

美矢　この世界に入って、日の浅い私ですけど好きで入ったんだし、ことしはいい仕事をするためにガンバリたいわ。

本誌　美矢さんは「禁じられたテクニック」でとてもいい演技をみせてくれたし、云っちゃ悪いかな、大器晩成型ね。ことしは美矢さんたちの時代だし、一つの交代期でもあるわけだから大いにやって下さい。

谷口　俳優たちの組合を作り横の連絡をとり合って、少しでも自分たちの立場を向上させようと試みたこともあったけど、結局、みんな自覚が足りないのよ。私は、いかに自分をみつめて前進するか—それが念願よ。

野上　いいたいことはいっぱいあるけど、やはりいい企画で、いいシナリオで仕事をして行きたい。そして男性映画を作ってほしいことね。つまりオトコが主役だけど、女優がやはり比重を占めてゆくようなもの、そんな映画を作ってほしいね。

新高　私はこの世界から去っても独立プロをよく見守りカゲながら協力します。みなさんガンバってね。

本誌　とにかくことしはみんなで、ガンバって行きましょう。ではこの辺で。どうもありがとうございました。

ピンク女優が雑誌界で大モテ

このごろは週刊誌や月刊誌のピンアップのモデルにピンク女優のモデル起用が目だっている。「漫画読本」の二月号のピンアップに水城リカが四つ折りのカラーヌードとして掲載（**写真**）されている。ソファに全裸でながながと寝そべり、明るくほほえんだポーズだ。水城は新藤兼人監督の「本能」のタイトルバックにオールヌードで出演独立プロの「学生妻」に若月ヒトミの芸名で出演している。

「ダンスよりアルコールが心を酔わす」のだそうで、角ビン一本あけるのに一日半だという。お茶も裏千家を修業中なそうで、孤独を愛する母親孝行なそうだ。

新高恵子が裸稼業を引退

ピンク映画のトップスターで、演技派の新高恵子がこのほど映画界から引退することになった。

理由は故郷の母親が娘のピンク映画に出ていることが故郷の青森でも有名になり、なにかと話題になり悩んでいる―というもので、このほど新高が田舎に帰って説得したが、母親が教員をしているところからきき入れられず、結局一時引退することになったもの。

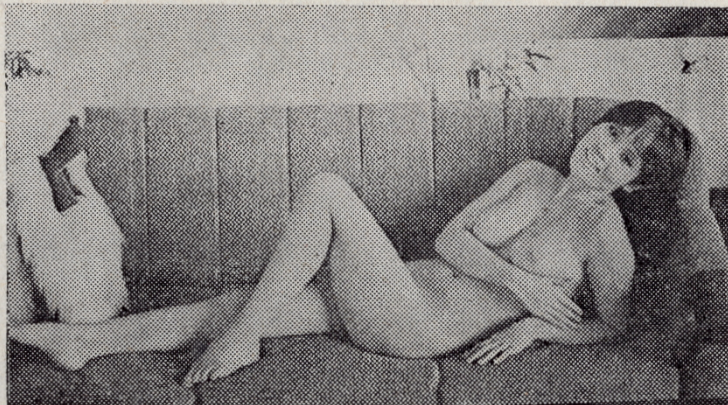
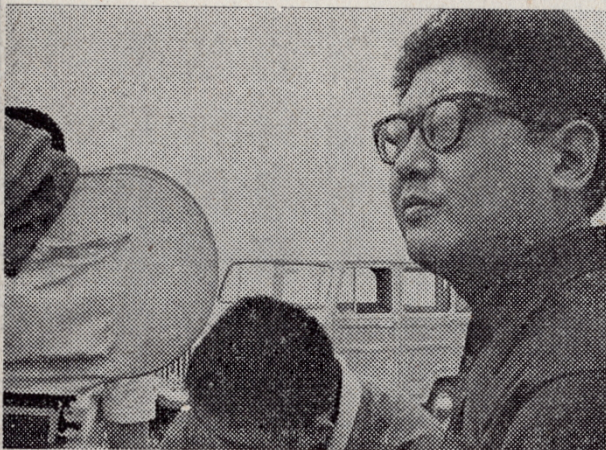
それにしても彼女の出演作品は二、三年間フィルムが各地の映画館を回るとすれば「新高恵子」の名前は消えないわけで、事実上は引退の成果はあがらないことになる。彼女は「周囲の目に私が負けたわけです」とあっさり認めているが、なにか後味の悪いものが残された形だ。

彼女は今後歌の方面で生きて行くそうだ。

さきに北御門杏子、志摩みはる、山中渓子らがつぎつぎとこの世界から引退してゆき、またも魅力的なトップクラスの新高が去ることはなんとも寂しい限りだ。

女のムネがふくらむ時

＝工藤那美のセクシー演技＝

工藤那美といえば、四年ほど前若松孝二監督がほり出して「網の中の女」に出演させた女優だ。その後、もっぱら葵映画作品で、香取環と共演しているが、そのころファッションモデルで清純だった彼女もごらんの通り豊かなるバストを披露してセクシーな演技をみせている。ふくらんだのはオッパイだけでなく、演技もふくらんだ―といわれる女優になってほしいね。「狙う」の一場面から。

■「媚薬の罠」で好評だった関孝二監督（新日本映画）ではことしの上半期作品をはやくも決定、準備にかかっている。二月に芸者シリーズの第四作「芸者」（主演谷口朱里）、媚薬シリーズ第二作「代え床」（主演美矢かほる）三月から残酷シリーズ第三作「ピラニアの女」（主演谷口朱里、美矢かほる）女ターザンシリーズ第三作「デルタ地帯」。

五月から海洋シリーズ第一作「牝鯨」（テクニカラー作品）を撮影の予定。

←「漫画読本」の水城リカ

★池袋文芸で大島週間

池袋文芸座では二月中の土曜のオールナイト興行に大島渚監督週間として松竹の「青春残酷物語」「太陽の墓場」「白昼の通り魔」「悦楽」の四本を上映する。料金は三百円。「白昼の通り魔」はこのほど日本映画記者会が41年度の最優秀日本映画に決定した作品。

■三人監督でオムニバス。若松孝二、向井寛、山本晋也の三人監督によりオムニバス映画「愛」が近くクランクインする。一人の監督が三十分を受持って「愛」について物語を展開させようというもの。製作は日本シネマ。

■独立映画配給者協議会というのが結成された。大蔵映画、日本シネマ、関東ムービー、国映、東京興映、葵映画、関東映配、ワールド映画、明光セレクト、六邦映画が加盟社で目的は独立映画配給界の業務促進をはかってゆこうというもの。フィルムのダンピング防止など、配給会社の相互の利益を検討し合うわけだが、これまでこうした横の連絡がなかっただけに一つの進歩といえる。

性の歓びに取り組む大島渚監督

《期待大きい異色作「日本春歌考」》

きょ年「白昼の通り魔」を手がけて、41年度日本映画記者会の「最優秀日本映画賞」をもらった大島渚監督がいま「日本春歌考」（創造社製作・松竹配給）を撮影中だ。〝庶民のうたえる性の悦び〟という副題の原題はカッパブックスの添田知道の原作。つまり〝Y歌史〟だがこの作品の底に流れる「性の歌を声高らかに歌う時こそ、人間が解放される一瞬の場面」という主張に共鳴、大島監督が全くオリジナルな形でドラマを創作して映画化するもの。

地方から大学受験に上京した男女高校生が受験日とその翌日の二日間だけの生活を描き酒席で教師からおそわった春歌を放吟しながら春歌の意味と青春と現代日本の姿を対比しながらとらえようというもの。

異色なのは脚本なしで、若者たちの日常の行動やセリフをそのままとらえてドキュメンタリーに映像化する新方式をとるものだが、出演者はレコード大賞新人賞の荒木一郎、フリーの田島和子、自由劇場所属の岩淵孝次串田和美、佐藤博、吉田日出子の新人ばかりを起用、ほかに伊丹一三、小山明子が出演する。カラー作品で三月公開だが、注目される一作になりそうだ。

もっとも強烈で，もっとも感動的
であった「砂の女」のベッドシーン

■スクリーンに見る

ベッドシーンの美学

★感動的なSEX行為

ベッドシーン、つまり男女のセックス行為場面ということだが、このベッドシーンがないことには大人の映画はお払い箱に等しい。

ドラマのクライマックスでもあるこの人間の愛情行為をいかに〝美しく〟描くかにウエイトがかけられるわけだ

「禁じられたテクニック」の美矢かほる

が、これまで洋、邦画のなかでこの場面が何千、何万回登場したか数えきれない。

このベッドシーンをみて、われわれは知らぬ間に感化され、〝ベッド生活の知恵〟を得てきたといえなくもない。そのことは体験者の方がよりよく知っていよう。

「あら全部脱ぐの?」

「きまってるじゃないか、ええ、一緒にみたあの〝男と女〟でもアヌーク・エーメがと素っ裸になってベッドシー野郎ンやってたじゃないか。あれが本物だよ。あのフランス式でゆこうよ」

とまあこんな具合いで彼と彼女がみた映画を応用、再現することになるわけだ。

★強烈だった「砂の女」

ところで映画のベッドシーンにウェイトをかける監督たちは一様に感動的により美しくリアルにセクシーであるこ

とにハッスルする。

毎回ベッドシーンが一つの見せ場、売り物にしてきた監督たちは異口同音に、「もうみせる手はなくなったよ。みんな出しちゃった。大体ベッドシーンなんてのはそんなに形があるわけじゃないもんな」という。

乳房へのキス、首、背中へのキス、そして抱擁の多用な場面が展開され女はのけぞり目を閉じ、声を発する。

このごろはストレートなベッドシーンをさけて、列車の車輪をみせたり、太陽を逆光でとらえたりして、ベッドシーンを別の想像で描く手法が試みられる。

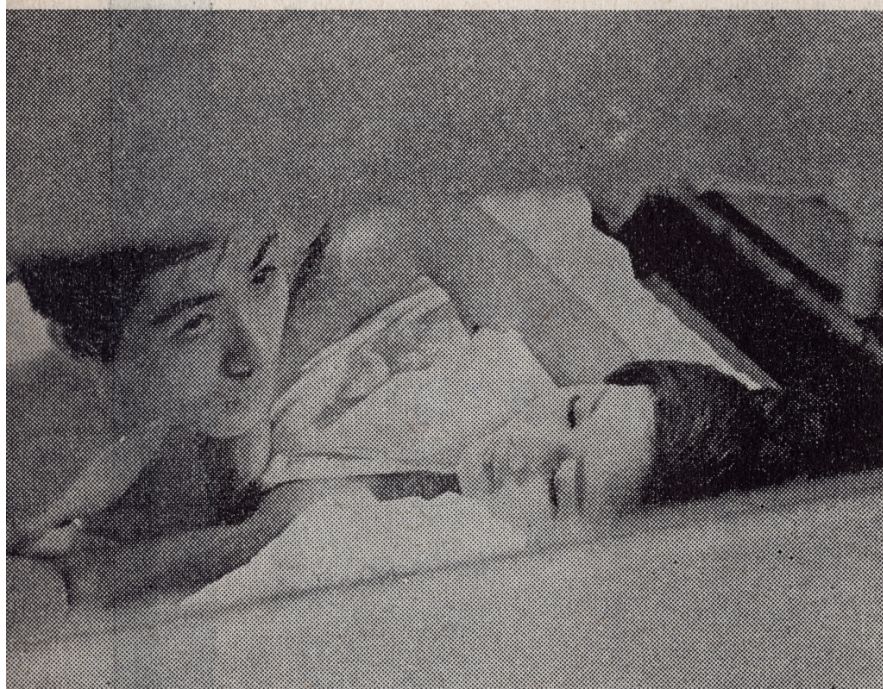
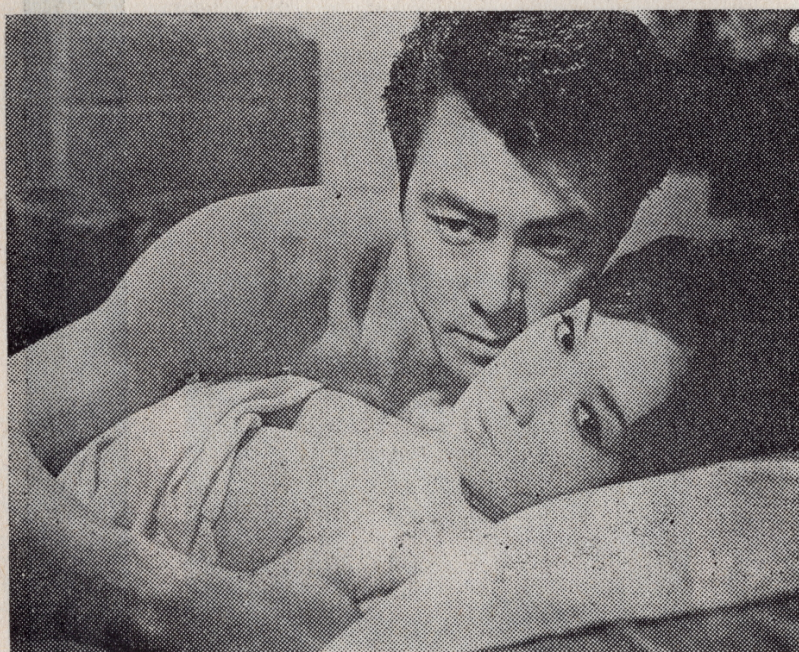
ベッドシーンでももっとも印象的で忘れられないのはなんといっても「砂の女」の岸田今日子と岡田英次の砂だらけのベッドシーン、若松孝二監督の「情事の履歴書」「歪んだ関係」の城山路子、向井寛監督の「禁じられたテクニック」の美矢かほる、大島渚監督の「白昼の通り魔」の川口小枝、そして一連の若尾文子のベッドシーン演技など数えあげたらきりがない。

「歪んだ関係」の城山路子

★女優の私生活を連想する

新劇の滝沢修が「結局、自分が日常見たりきいたりしたことが、演技にあらわれてくる。生活体験が出てくる、役者は現実とクサレ縁を結ばなければならないんですよ。それと虚構の世界に奔放に生きられるということですよ。現実の生活とのかかわりあいを広く深くすること……」とのべている。

となると、女優が演じてみせる一連のベッドシーンは現実の生活（性活）体験がモノをいうことにもなるわけだ。

ベテランになり得るには生活体験のつみ重ねである―とあれば、ベッドシーン演技もそこに女優の真の姿がスクリーンに再現されているとみていいわけだ。

ベッドシーンのうまい若尾文子・田宮二郎

盗作のすすめ

天才は盗作から生まれる

映画は企画が問題にされ、口をあけば「いいアイデアないですかね」といい合う。

独創性がないとかいわれつづけているが、一体独創性とはなにか—この点について映画人にトクと参考となる発言があったので参考までに。

版画家でいまや世界的に売れている池田満寿夫氏（ベネチァ・ビエーンナーレ国際展で最高賞を受賞）が朝日新聞の夕刊（1/12日付）に「私の現代美術論」を書いている。それに

台湾から津崎公平のロケ便り

「悲器」（国映）「情欲の黒水仙」（六邦）で異色なタレントの津崎公平さんが、「母ありて命ある日に」（監督湯浅浪男）の撮影のため台湾に渡ったのが昨年の十一月。このほど近況を知せてきた。

台湾との合作「母ありて命ある日に」があと二、三日でアップします。二時間を超える大作ですが、私は相変わらず仇役でウンザリしています。台湾にきて三本とりましたが、三本とも殺される役ですから台湾女性にモテる余地がまったくありません。なぜ私のようなロマンチストを悪役でして使わないのか、私は声をだいにして全世界のプロデューサー

恋人が妊娠すると

＝伊映画「恋人たちの世界」

恋をしているものならその恋心が痛いほど胸に突きささってくる映画がある。監督がビットリオ・デ・シーカで「恋人たちの世界」がそれだ。

話はきわめてカンタン。カメラマン（ニーノ・カステルヌオーボ）と医学生（クリスティーヌ・ドラローシュ）が大学のパーティでふと知り合いその場で二人が関係してしまう。そのインスタントぶりにいささかビックリするが、彼女はその一発で妊娠してしまう。一言の会話もかわさ

よると「いかなる天才であっても、様式上の完全な独創などあり得ない芸術家はいつもさまざまなものから、さまざまな要素を盗んでくるだけである。伝統の中から、人類の絵画の歴史の中から、同時代の芸術作品や観念から、現実や過去の生活の中から、あるいは自分や他人の記憶の中から、一枚の写真からでさえ、さまざまな方法で盗んでくるのである。その盗み方が問題なのだ。イマジネーションの独創性とは、その盗み方の独創性にほかならない」。なるほど考えてみれば映画も過去の名作の中からそれぞれさまざまの要素を盗みつづけてきたではないか。

さらに池田氏は「私はかたっぱしから盗み取ってきたが、しかし感覚だけは盗めなかった」といっている

現代は疑いもなくアイデアの時代だが、その素材に対する正確な知識と技術がなければならない。技術は自分の表現力だ。プロフェッショナル(職業的)な自信を強め、盗み、感覚をひらめかす…これが現代のあらゆる人々にもっとも必要なことなのだ

に訴えたい。この国には著作権なんてまるでなく日本の流行歌が街に氾濫し、どの映画も海賊版がウヨウヨしています。

台湾映画はカラーは別として白黒映画は技術的に日本にはるかに劣ります。予算も三百万円見当で、初期のピンク映画なみですから無理もありません。思想統制が極端なため、メロドラマかアクションしか作れない現状も、台湾映画を貧困にしている大きな原因だと思います。

羨ましく思うのは、少なくともエロ・グロに頼って映画を売ろうという卑劣な精神がないことだ。日本に帰ってもピンク映画に出る気持はありません。随分かみついてきましたがそれすらも空しかったことのような気がします。湯浅監督を初め、スタッフの評価はとてもいいようです台湾は酒と女の国です。多少ボケることはあるかも知れないが、人生これに勝る幸せがありません。台湾の人は日本人に好意的です。日本人として恥かしくない成果だけはあげて帰りたいと思います。

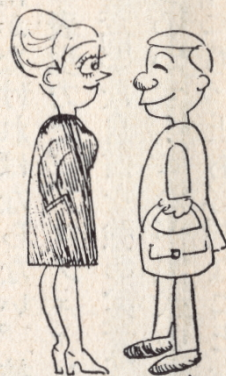
津崎公平

ず、名前もあかさずにパーティ会場の隅っこで二人ができ上がっちまう芸当はいかな日本のプレイボーイでもマネができないだろう。男も女も熱烈になり、しばし逢う瀬を楽しみあう。キスの連続は数えられないくらい。まるで恋人たちの世界というよりもキスの世界と題名をかえたいくらい。

さて女は中絶するべきか否かで迷い、結局相談の末、おろすことを決心する。彼女はやっと手術台に上がったものの、どうしても手術できず泣きながら彼の待っているところに帰ってくる。彼女は再び手術台にのぼるが、子供を生むかは解決せずにみせない。

オッパイをさわって妊娠かどうかを調べるシーンとかベッドシーン、手術台シーンは映倫でカットされているが外国ヌード雑誌のピンアップでチャンとジャングル地帯がみられるのが余ロク。

若い男女の恋の心理描写が刻明に描かれさすがデ・シーカの腕の冴えだ。

（井茶門三郎）

▼…ガールハントというお遊びは一度やったらトリコになってしまう魅力があるらしい

未知の女性をあらゆるテクニックで攻め落とす。スリルと冒険と頭脳作戦である。東京のガールハント地帯を紹介すると、銀座スキヤ橋公園のサテライト・スタジオ前。ここは夕方5時から7時がアナ噴水のまわりにどこからともなく20才前後の女性が集まってくる。一見女子工場従業員か店員という感じ。ショートコートを着ているのが多い。二人か三人のグループを作り並木通りや三原橋方面に消えてゆく。〝くるみの会〟というのを組織している。目的はズバリマンハント。このグループが集まって出かける寸前が狙うコツなそうだ。

× × ×

▼…新橋の土橋際のダンス・ホール「全線座」の前もアナ場。7時前後にデパートの女店員がごっそりとやってくる入場前に誰かパートナーになってくれないかーと人待ち顔をしているから「相手が来ないので踊ってくれますか」と誘えばOK。

× × ×

▼…渋谷の道玄坂と東宝の反対側の歩道はデパートの女店員のハンティング・グループがさかん。渋谷のデパート・ガールだけでなく、銀座・新宿からも集まってくる。タイムは7時—8時がピークだ。ハントしたらすぐズバリバーへつれて行きカクテルの一二杯ものませホテル直行がてっとり早い。

× × ×

▼…新宿駅南口　甲州街道に面した一帯は洋裁学校の生徒とか、短大生などが多い。時間は6—7時。カーを持っていたら絶対。レンタカーでもいい。車のまま南口にのりつけて声をかけること。それと新宿の都電通りにあるレインボーというマンモス・バー。ここはその夜限りの友達を求めてくるBGでいっぱいだ。

コツは隣合わせて名前をきき出し、一たん外に出て電話で呼び出す方法がある。ややこしいがこれもパズルに挑むようなスリルがある。

× × ×

▼…仙台の夜もローカルカラーが一ぱい。仙台駅に近い「元寺小路」付近。駅から歩いても五、六分。斜めの大通りに国鉄のX橋という陸橋がある仙台の一夜を楽しむには橋の脇にヌード劇場がある。出しものは関西ヌードで、ズバリもいいところ。女体のウラ表を十分に観賞できる。その小屋の周辺に唇の赤い女性が、「ヌードみてコーフンしたでしょ。そのままじゃジュニアが可愛いそうじゃないかしら？」といって寄ってくる。商談成立したら陸橋付近の小ギレイな温泉マークに案内してくれる。「あたし、今夜はアルバイトぬきでハッスルしたくなったわ」と朝まで寝かせない女もいるからタノシイ旅行カバンを下げてウロウロしていたら、きまって二、三人の女に引っぱられる。「旅行者はあとくされがなくていいわ」

山形、岩手の農村から安定所を通じて働きにきた女性が多い。ほとんどアパート暮らし。二枚が相場。

女優・清水世津

とりたてて美人ではない。それでいて男性をひきつけるセックスアピールがある。素朴感も身上だ。ピンク映画のガリアンヌ〈恋するガリア〉として使える要素を多分にもっている。

〈スター訪問〉成瀬恵子

女性は着替えるときがもっとも悩ましい

〈スター訪問〉成瀬恵子」

ベッドだけの三畳間

本文へ続く

まだ主役をやれるほどの存在ではない。まだつぼみにもならない春の新芽だが、ことしは女優の交代期といわれるだけに成瀬恵子のジャンプぶりが期待されるところ。素直さ一点ばりの彼女をアパートに訪ねてみた。

■にくめない純情さ

その日は物凄くさむい日だった。テレビの天気予報が東日本の大雪を知らせ、東京地方もことし最高のさむさ—という夜、シベリヤからの寒波でガタガタふるえている最中である。彼女に連絡をとり、京王線の八幡山駅前で待合わせることにした。まだ七時だというのに人影もまばら。

駅前のラーメン屋の赤ちょうちんが風にゆれている。

待つこと約十分。こちらはお腹の底まで冷えきって水っぱなだ。

「ごめんなさい、待ったでしょ」

（あったりまえよである）

マフラーをすっぽりかぶって済まなそうな彼女がぺこりとお辞儀をした。

ああそのあったかそうなホッペタ。にくめない彼女のカオにまずは〃いいさ、いいさ〃になってしまう。

「こちらなのよ」と彼女のあとについて行くと線路ぞいに一方は原っぱで北風がピューときこえてきた。なんとも淋しい地帯だ。夏になると雑草におおわれるそうだが、ぬかるみの道は凍ってパリパリ音がする。こんな淋しい雨でも降ったらドロンコになる道を彼女が通っているのだ。

「夏になると痴漢が出るのよ。家にいると〃助けてぇー〃という叫び声がよくきこえてくるのよ」

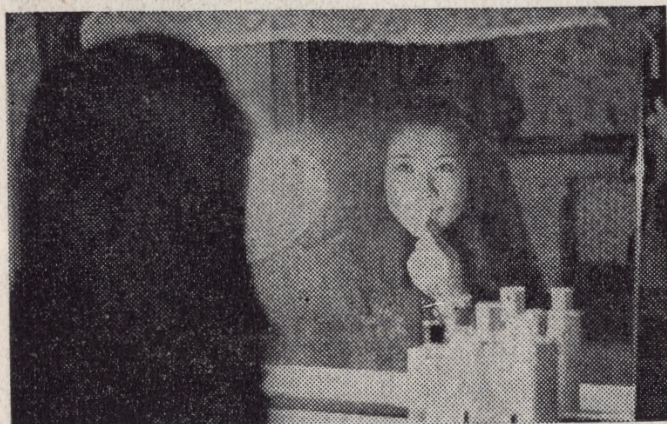
■ベッドだけの部屋

歩いて駅から約十分（だがさむさで駅から充分だった）アパートの一室を借りているが、そこは知人の家で、気心も知れていて家族同様に生活しているのだそうだ。もう一年半、実家の横浜には仕事のない日はほとんど帰ってしまう。二階の三畳間は彼女の〃ベッド〃だけのものだそう。

玄関に入ったら数十足の靴やサンダルがところ狭ましと並んでいる。

家主が、創価学会の信者で、今晩は集会。「あなたも入ってんの」ときいたら「そうなの」と多くを語らない。

近くに住んでいる脇役の女優三枝陽子さんも来ていて近ごろの映画界音信のあれこれ

彼女は熱心な信者である

鏡の前にすわると急に大人っぽくなる

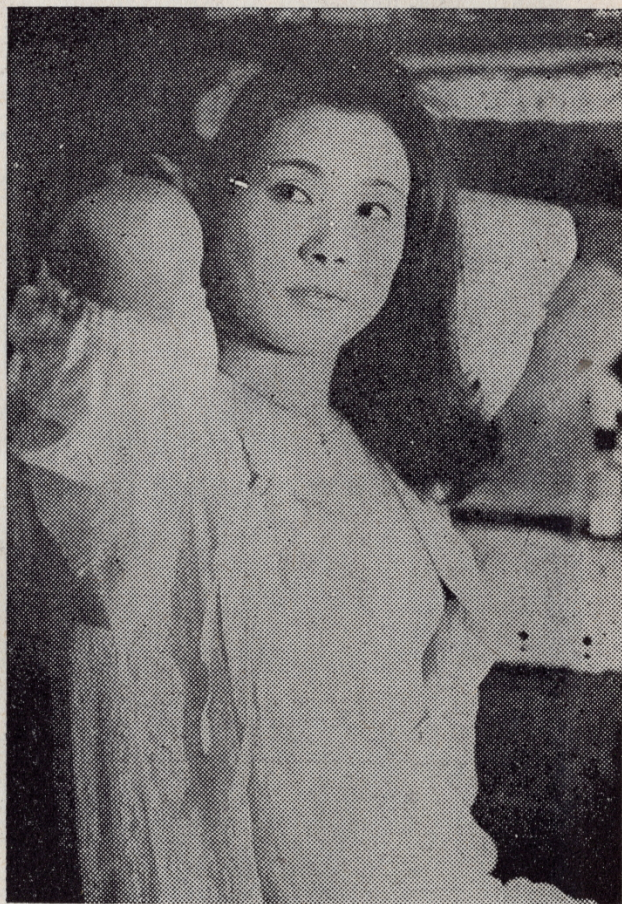
を語り合う。

「私が恵子ちゃんの身元引受人なのよ」という三枝おばちゃん。世話好きで話のわかる女優だから大方の信頼をよせていいだろう。

透けたネグリジェ

とにかく彼女の狭まいながらも楽しいわが三畳間をみせてもらうことにする。部屋には一面鏡、洋服ダンス、本棚それに創価学会の仏壇が飾られている。

「ほとんどこの部屋にはいることないのよ。下の大家さんの部屋で若い人達とダベっているときが一番たのしいわ。食事だってみんなと一緒だしまあ家族の一員みたいなもんね」

本棚をみると、池田大作の「人間革命」やら学会のさまざまな本が並んでいる。そのそばに、ロケ地でおみやげに買ってきたコケシや人形がところ狭しと飾られていた。

「ネグリジェでも着たセクシーなところを一枚お願いします…」とカメラマンが注文した。すると彼女とっさに押入れからピンクの透けてみえるナイロン製のネグリジェをひっぱり出した。

「ブラジャーなしのネグリジェスタイル」という注文で、彼女はパッパッとセーターとスカートをぬぎ、着替えをはじめた。オオ、そのなんと悩ましきことよ。胸のふくらみ豊かにゆれる…である。

白い胸の谷間やオッパイがチラチラのぞく。

「あたしのは意外と小さくて…」などと彼女は遠慮する。

なぜ女性は大きくなりたいのだろうか。「いまの方が申分ござんせん」とカメラマン氏がしきりと礼賛する。

ネグリジエからこぼれる乳房が悩ましい

色気がでてきた

火の気のない部屋であれこれポーズをつけての撮影は相当にコタえたが、彼女はよく協力してくれる。

しかし彼女が一人でこの部屋にいるということは大変な忍耐と根性がいるんだろうなあーと思う。正月早々、十日間関西方面に舞台挨拶に行ってきたばかりだが、近ごろは仕事にも欲が出てきて、早くも売れっ子ぶりを見せている。

「舞台挨拶に行ったのは始めてだけど、お客さんの反響が解りすごく勉強になった。熱心なファンがいて一緒についてまわってくれたの。これからもいろんなところに行って勉強したいわ」

「ヒップで勝負」(国映)でデビューして三年。地味な存在だった彼女も、最近はお色気を増して女らしくなった。これからのピンク映画の担い手として活躍することだろう。

スタジオ戯評

■スラックスがもっともよく似合う女優といえば清水世津。スラックスで最近もっともイカシた映画といえば「恋するガリア」のミレイユ・ダルク。

あんまり美人でないところも似ているなら、オッパイの格好もよく似てんだな。

清水世津とスタジオ風景

文・イラスト　眼次郎

■ダルクが着ていた男物のメリヤスシャツ。あれはパジャマに利用できる。恋人がいたらベッドで彼女に着せてみるんだな。デパートで350円のを1枚買って清水クンに着せて“清水ガリアンヌ”に仕立てて撮影。オッパイが透けてみえてセクシーなんだ。

■彼女の脱ぎっぷりは実にあざやかでサッパリしている。これもガリアンヌばり。

■清水の大胆なヌードぶりにスタジオの照明氏もポーッ。「熱いからコーラでももってきましょうか」あーもっともだ、もっともだ。

ピンク映画みたまま

興味本位の映画作り

映倫の発表によると、昨年一年間に審査したピンク映画は、一九一本にもなるそうだ。一昨年にくらべれば約五十本減っているが、内容のある作品は一昨年のが多くあったと思えるほど最近のこの世界のものはひどいものが多く質的低下もはなはだしい。

見せ場とする手につまって、暴行、ベッドらのシーンは相変らずのまま、顕著な傾向としては変態的な人間の恥部というか、あくまでも個人の中に伏せておくべき、サディスト、マゾヒストを主要な登場人物として物語りを作って、異常なショッキング・シーンとするものが増えてきた。

映画が、あくまでも大衆娯楽の王座にある今日、その社会性ということはなんら考慮に入れず、ただ異常な興味のみを見せ場として、ただ作ればいいんだというだけの製作態度は大いに糾弾さるべきだと思う。こうしたことを平気でくり返していると、いつ、どこから弾圧にひとしいことをされても、文句のいいようがなくなる。こうした目先だけのことで作っている一部のプロダクションのために、多くのプロダクションが被害をこうむるということもないとはいえない。映画人としての誇りがあるなら、この点大いに肝に銘じて欲しいものだ。

「いたづら」の飛鳥公子

以前に比べて、最近は見る気がしなくなってきているので、あまり見てないが、その中で一言ふれてみよう。

荒っぽい向井作品

季節がら雪を登場させた作品を三本見た。向井寛監督の『かよい妻』、山本晋也監督の『いたづら』、西原儀一監督の『狙う』。

『かよい妻』は谷口朱里をヒロイン

「かよい妻」の谷口朱里

に家の事情で恋人を捨て、都会に出た青年が愛のない生活にいたたまれず、田舎に帰ってきてみると、かつての恋人が娼婦になっているのと遭遇し、再び愛の力でどん底の生活から恋人を救おうとする話だが、一応、ソツなくまとめてはいるものの、「禁じられたテクニック」「情炎」の佳作と同じ監督とは思えないほど荒っぽい仕上りだ。主人公が、恋人と会い、そこからはいあがろうとする設定も、新藤孝衛の「雪の涯て」に余りに類似しているので、共感度が少ない。それよりも主人公をもっと掘り下げ、どうして娼婦になっていったのかえぐっていけばよかったと思う。女の生活環境がまるで分らない。力のある監督だけにあえていいたい。

「狙う」で熱演する香取環

喜劇にならない山本作品

「いたづら」は山本監督としてはまだ早いというか、若さを露呈していて寸足らず。コメディをもっとよく勉強して欲しい。五社のベテランでさえも、二の足をふむのが喜劇なのである。現代に生きる一つの学生のタイプを描くとするならば、もっとシリアスに描くべきだ。俳優にしても全然、さまになってない。

雪のロケはいいが

「狙う」は、ミステリィ仕立てのアクションものだけに、ロケ効果はほめていいが、前半で筋が分ってしまうのは、一考すべきである。いい変えるならシナリオの練り方が足りない。中途半端なアクションなどに力を入れず、ヒロインの香取を中心に話は作るべきである。娯楽作としては、まあまあの出来だ。

後藤　敏（映画評論家）

× × × ×

× × × ×

ピンク女優としてのジレンマに悩む

可能　いま私、なんにも手がつかないの。いろいろ考えることばかりで…。
川島　なにをそんなに悩んでいるの。誰れかにゾッコン参っているの？
可能　そうならいいんだけど、いま考えてるのは、このままピンク映画で仕事をして行っていいものかどうか、もっと根本的なものからやり直さなけぁいけない―と深刻に考えてるのよ。この世界（ピンク映画）でいくらやっても限度がみえて、あまり希望がもてなくなったことなの。

くない！

ゲスト■ 可能かず子

「ピンク女優廃業」と冒頭から爆弾発言する可能さん

それと〝可能かず子〟が、他の堅い仕事をしようとするといろんな障害があるってことよ。芸名をかえるか、ピンク映画をやめるか―という深刻なところまできているわけなのよ。
川島　あなたは女優としての根性とか姿勢がしっかりしていないからそういう障害にぶつかるのよ。たとえば仕事の時もかならず遅刻するということも考えなくてはいけないし、何か忘れているんじゃないかしら。ことしはどんな方向にゆきたいの。
可能　ことしは他の人と同じようにスタートラインに並びたいことね。一般的価値評価をうけるような仕事をしたいわ。私の映画をよくみて下さる人からデンワがかかってくるわね。そこで、最近どんな作品をごらんになりましたか―ときくと、〝さあ題名も内容もあまりよくおぼえてな

いんだけど…〃なんていわれるでしょ。こんなことしょっ中なのよ。これが一般的な私の評価なのねと痛感しちゃう
　だから題名とどんな役をしたかぐらい覚えておいてもらえる仕事をしないと、いつまでたっても、霞くってるようなもんでなんにもならないんじゃないかと思うのよ。

演技は基礎から
やりなおしヨ

川島　しかしみんながみんなそう思ってるわけじゃないわよ。やはり可能かず子の存在は認めてるわよ。
可能　しかし勝新太郎の「座頭市」とかみんな知ってるでしょ。
川島　しかし二百万円程度で作る映画の立場と二千万円の映画の質との違いだし、それはムリよ。でもあなたの耳の届かないところで評価している人だって多いわよ。たとえば「裏切りの季節」を撮った大和屋竺監督があなたの「壁の中」をみて、ボルネオに行き、あなたのことばかり考え素晴しい女優だ、日本女優の中でもっとも魅力のある人だ―といっていたじゃない。そう真剣に評価してくれる人がいるのに、一ファンの愚にもつかない上っ滑りの声に深刻になるなんてあなたらしくもないわよ。
可能　いま私ね、劇団世代に入って演劇の基礎的なことから勉強してるのよ。週二回だけど。毎回台本とノート持

連載インタビュー NO.6　■きく人／本誌・川島のぶ子

もう裸にはなりた

約束の時間よりおくれること約一時間半。可能かず子は遅刻の常習犯というのが、スタッフの間で通っている。その彼女がさっそうとやってきたスタイルは縞馬の毛皮のコートにエナメルの長いブーツ。いきなり、勢いこんでいうことには〃私ピンク映画をやめたいの、それとも芸名をかえようかしら〃ときり出したものだ。新年早々深刻な発言だが、話合ってみると、どうやら彼女の定期的な「女優ブランク病」という奴らしい。結論は彼女の〃芸術〃？　をよく理解してくれる恋人が最良の特効薬といえそう。（川島）

大いに発言する可能かず子さん（右）と川島のぶ子

って行くんだけど、聞いてることだけが精いっぱいでノートする余裕なんかないわね。でも楽しいわ。

脱ぐだけの妥協は演技じゃない！

可能　私ね。どうして劇団に入って一歩からやり直そうと決心したのかというと、独立プロで何年かやってきて監督からキミの芝居は違うんだ〝こうしなさい〟と激論したり、一生懸命考えて私が泣きながら芝居したってこと一度もないのよ。すぐ妥協しちゃうのよ。時間もないし、フイルムもないしお互い安易な妥協の仕方で仕事をしてきたでしょ。そうしたことで自分が一体どこまで芝居ができる女優なのかがわからなくなってきちゃうの。

川島　安易なマンネリズムに抵抗したってわけね。

可能　このままで甘えていていいのか知ら、脱ぐことだけに甘えていることが急に怖くなってきたのよ。

劇団では「よ」一つのセリフ回しでもさまざまの意味があり、それをどう表現するかに真剣でしょ。その点独立プロの監督から〝おまえは大根だ！女優なんかやめちまえ！とどなられてほっぽり出されたことが一度もないのよ。

川島　泣くほど叱かられたいってワケね。

可能　しかし監督がなんにもいわず叱られないくらい私が芝居がうまいと思ってやしないわよ。やっぱり妥協してきたことの甘さね。それには耐えられなくなってきたことは事実だわ。

川島　そこまであなたが自分を見つめてきたってことはえらいことだと思うわ。しかし、うぬぼれてはいけないわ監督だって百パーセントあなたに妥協しているわけではないのだから。

ピンク映画だって立派な作品

可能　いまの可能かず子は独立プロで作られたものでしょ。それはピンク映画で育てられ可能性があったからともいえるし、仕事ができるわね。それがズブの素人だったらだれも使ってくれないわよ。それだけにいまのものをムダにしたくないわ。だからテレビなんかの仕事がかかって、ピンク映画の可能かず子だから芸名をかえてくれっていわれると反発感じますね。

川島　でもね、あなたにはあなたのよさと魅力があるわよ。なにもテレビに出るからって芸名かえる必要がないじゃない。それあ、いまのピンク映画がパンチがないのはわかるけど、もっと上昇すると

裸演技には限界があるか？

きがくるし、芸名のことなんかとやかくいうことないじゃない？

可能 ただ私は待ちきれなくなって、待って待って待ちくたびれて疲れちゃったのよ

川島 しかしあなたがせっかくここまでたどってきたのに自から築いた〝可能かず子〟を簡単に捨てることないわ。映画ってものはみんながより集まって力を合わせて小さなことでも工夫して作っていってるわけでしょ。ピンク映画をバカにするべきじゃないわ。

それぁ、あなたよりまだ恵まれない人がウンといる。タイトルに名前も出ないチョイ役だっているし、大の男がギャラだってあなたの半分の人もいる。でも好きで、なにかの可能性を求めてやっているわけでしょ。あなたが周囲の色目をおそれてエリートだけに走ってしまっては可能性の可能の芸名はなんの意味もなさないじゃないの。

これまであなたの演技力やパーソナリティを認めて起用し、作品をあなたに賭ける監督がいることをもっと深く考えるべきじゃないかしら。

叱られて芝居をしたい

霞くってるみたい

結婚しようかな？

精神的な貧しさは耐えられない

川島 しかし人間って身入りがよくて、上昇気流にのっているときはやめるなんて絶対にいわないわね。パッとしないブランクなときにへこたれない—ということが大切じゃないかしら。

可能 しかしいまみたいに悩んでいると、田舎(九州)に帰ろうかな、結婚しようかなあ—なんて考えちゃうわね。でもふと考えてみると田舎の母のところに帰ったって私の居場所はないし、まして結婚しようと思ったって私にプロポーズしてくれる男性は一人もいないし…。

川島 しかしあくまで自分でしかないということ。頼るのは自分でしかないわけね。

可能 私、無器用でしょ。なんにもできない女でしょ。歌とか事務とかやれるとイザというときに役立つんだけど

川島 しかしなにもかもできるってのは逆にマイナスのこともあるのよ。

可能 しかし私が芝居は下手だし、それしかできないでしょ。

川島 強力なものを自分で育てること、毎日が闘いよ。

可能 貧乏だけど、ことしは…

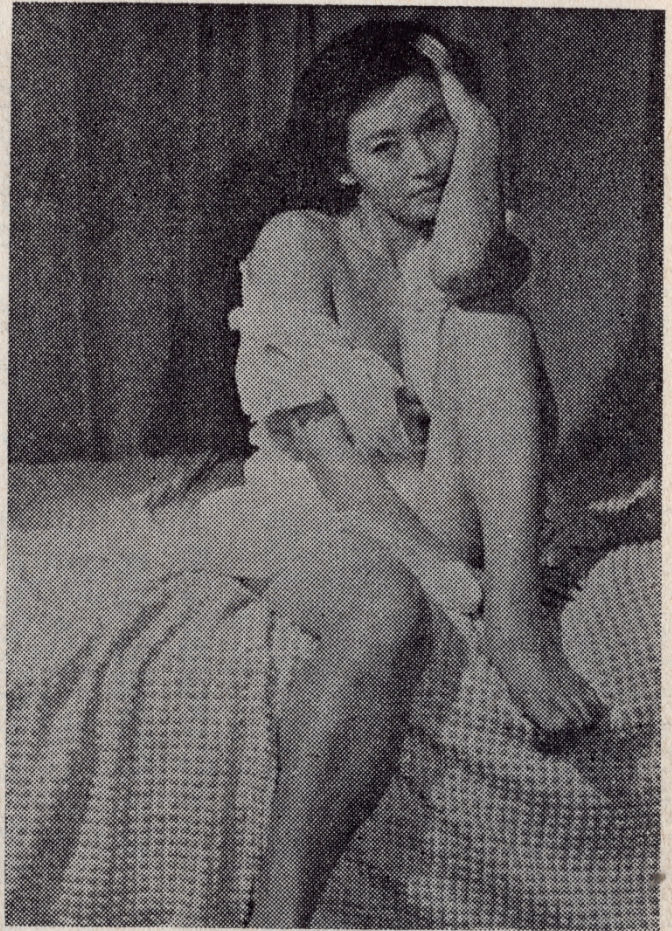
川島 あなた決して貧乏じゃないわよ。そのスタイルみて…いい格好してるじゃないの。ゼイタクよ。

可能 物資的な貧乏はなんでもないわ、精神的に貧乏なのが一番こたえるわね。

川島 そうよ、精神的に豊かになることはやはり自分が信じたことに向って進むことじゃないかしら。

新作紹介

今月のスクリーンエロチシズム

<その1>

「愛情開眼」の新高恵子の悩殺ポーズ

愛情開眼

＝大蔵映画配給

▼愛情に飢えた女の異状な行為を描く

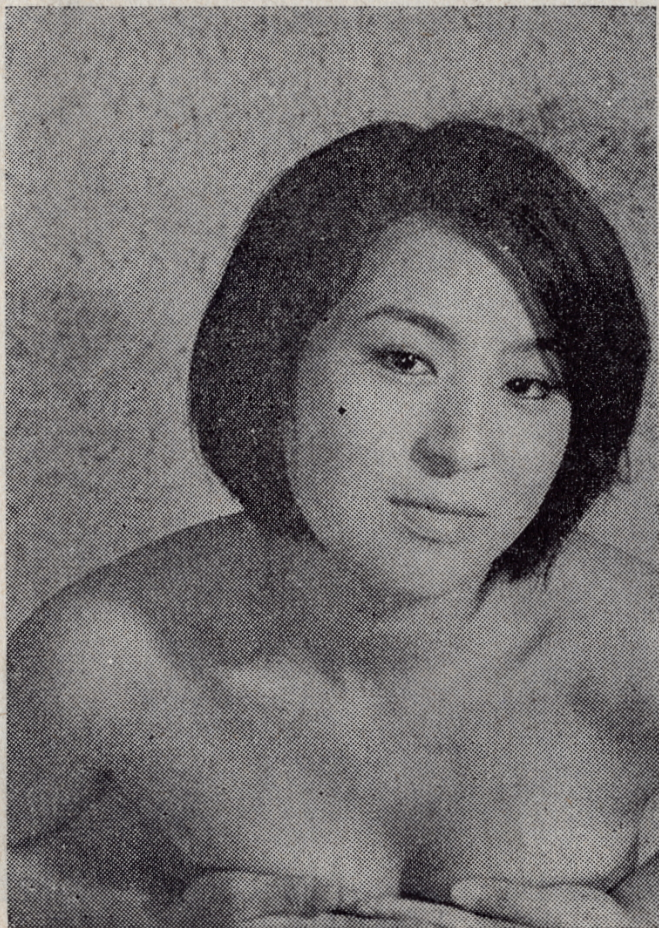
美貌のオフィスレディの雪子（新高恵子）は三十近くになるが独身である。フーテンのみどり（岡本弘子）をアパートに泊めては、みどりに男役をやらせ、肉体的喜びを味わっていた。ゲイバーのバーテン春夫（野上正義）は、ゲイ趣味の中年男たちの相手をする一方、店に来る若い女をひっかけてはセックスをたのしんでいた。雪子はそんな春夫に処女をあたえてしまう。女同志の愛撫とは違った快感を春夫のテクニックの中で知る。婚期のおくれた雪子が初めて知った女の喜びだった。

製作＝ヤマベプロ
監督＝経堂一郎

媚薬の罠

＝国映配給

▼妖しい美しさを画面一杯まきちらす美矢かほるの熱演

新婚旅行の初夜、綾子（桂奈美）は夫の武夫（里見孝二）の激しい愛撫に絶えかねダムに投身自殺を計るが、山寺の墓守りの源造に助けられる。昔から大切に持っているまむしの精の媚薬を与え、二十年前の媚薬にまつわる話を綾子に聞かせるのだった。当時、源造には妻八重（美矢かほる）娘百合（成瀬恵子）とがいたが、村ではヘビ持ちの家と嫌らわれていた。百合は恋人峰男（野上正義）と結婚できるのを楽しみに待っていたが、山の荒くれ男達に処女をうばわれ自殺する。娘の復讐を誓った八重は秘蔵のヘビの精をのみ妖しいまでに美しくなって媚態を武器に荒くれ男達に立ち向かってゆく。製作＝新日本映画・監督＝関孝二

「縄と乳房」の斎藤道代

「媚薬の罠」の桂奈美

いたづら

＝日本シネマ配給

▼一千万円で子宮を一年貸します!!

金森夫婦（飛田八郎・小松みどり）には子供ができなかったので女性をみつけ金銭で契約し、子供を産んでもらおうという結論に達した。カメラ商会の社長である金森はヌード撮影会を催しては自分の目的にかなった女性をさがし続ける。そんな時美大の学生夏子（清水世津）が金森夫婦の目にとまる。一年間子宮の貸借契約が一千万円でかわされ、金の〝卵〟を産むため金森と夏子は一生懸命励みつづけるが、妊娠の徴候が少しも現われない。夏子と同じ部屋で生活している冬子（飛鳥公子）が妊娠してしまう。夏子は一計を案じた。

監督＝山本晋也

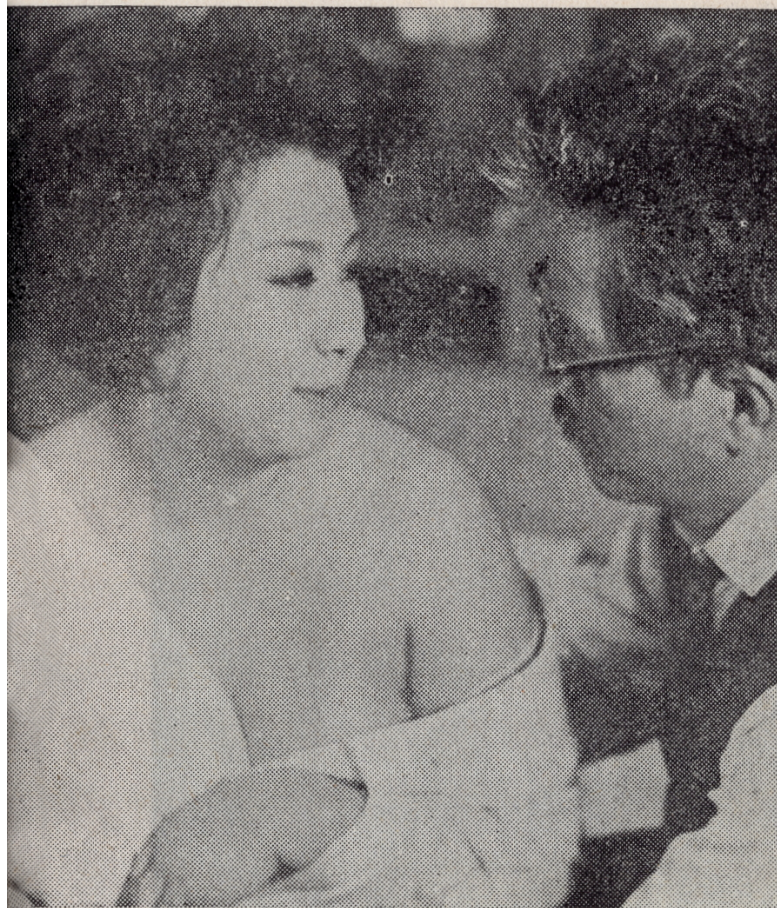
縄と乳房

＝関東映配配給

▼夫へ復讐するサディストの妻

旅館〝大湯〟の養子市太郎（伊海田弘）は心臓病持ちのうえ、サディストの妻節子（新高恵子）に耐え切れず、愛人のバーのホステス弓子（斎藤道代）のもとえ飛び出してしまう。

夫への復讐をたくらむ節子は下男の清次（長岡丈二）を強迫し、弓子を誘拐しようとするが、弓子の姉絹子（桝田邦子）を間違えて誘拐してしまう。そして地下の密室へつれこみ裸にして、鞭責めや水責めにする。鬼気迫るサドの極致をえんえんとくりひろげのたうつ絹子を見て節子は気が狂ったように笑い続けるのだった。製作＝ヤマベプロ・

監督＝岸信太郎

「みだれ髪」の松井康子

「いたずら」の飛鳥公子

真夜中の花園

＝関東ムービー配給

▼美しさゆえに崩れた女の弱さを可能かず子が好演

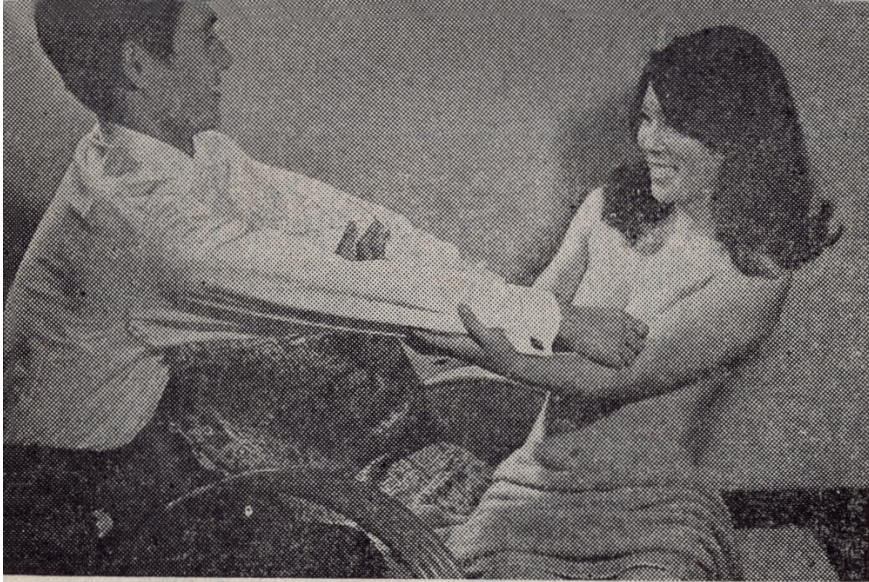
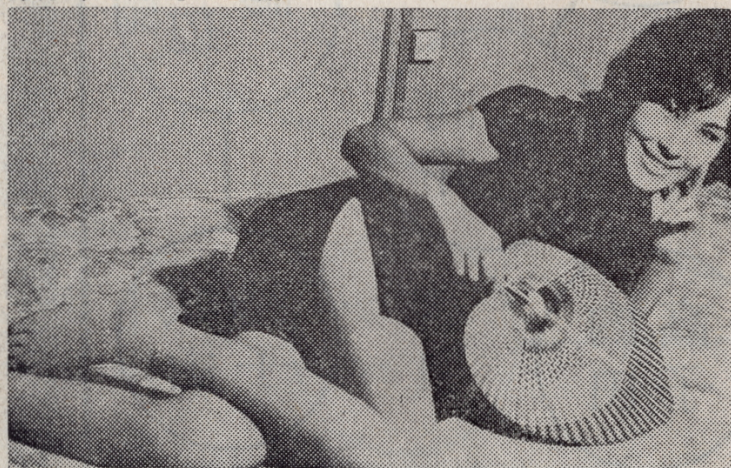
看護婦の恵子(可能かず子)は豪農の息子庄一と結婚したが、夫は交通事故で急死してしまう。やっとつかんだ幸福も永くは続かなかった。義弟の五郎(井村弘史)は美しい恵子に好意を寄せていたが、社長令嬢の京子(成瀬恵子)と婚約してしまう。恵子は東京に戻り看護婦として働くが、美しい恵子は同僚から嫉妬される。医師の柴田(泉田洋志)は恵子をバーに誘い体をうばい同棲してしまうが、同僚の典子(浜裕子)に激しく責められ、恵子は病院を退めキャバレーのホステスになり夜ごと酔っぱらいの相手をするのだった。

監督＝高木丈夫

女教師の秘密

＝東京興映配給

▼高原の夜に狂った異常な情欲

女子大教師の美江子(藤村早苗)と教え子の未利(東久美子)そのボーイフレンドの五郎(吉川次郎)の三人は駒ケ岳登頂を目指し山麓の山荘にたどりついた。美江子と未利は同性愛であるが、今は美江子より五郎を愛していた。山荘には以前、美江子と同性愛だった人妻京子(加山恵子)が夫との不和から家出してきていた。十五年前、京子の姉道子(加山恵子二役)と美江子と学生時代駒ケ岳に登り、〝雲の通り道〟で自殺した謎を解き明そうという目的もあった。大自然の高原で繰り展げられる狂った愛欲。事件は意外の方向へと進んでゆく。製作＝プロダクション鷹・監督＝木俣堯喬

「真夜中の花園」の成瀬恵子

「女教師の秘密」の東久美子

「処女生態」の美矢かほる

処女生態

＝東京興映配給

▼男にとって処女は絶対条件か！　女の転落を美矢かほるが演ずる

たった一度の災難のために女は一生黒い十字架を背負わなければならないのか。酔漢に暴力で犯された女がたどる屈辱の裸形。美矢かほるが官能的な演技をみせる。

山口章子（美矢かほる）が婚約者に身をまかせている幸福な一瞬だった。女は男を信じきっていた。だから、強姦によって、すでに処女でないことを打ちあけてしまったのだ。しかし、男はそれを聞くとにべもなく突き放してしまう。章子は妊娠していた。職場を失なった女が、生きていく方法は簡単だった。肉体を売ったのである。それからの転落は早い。左京未知子、里見孝二が共演。監督＝小森白

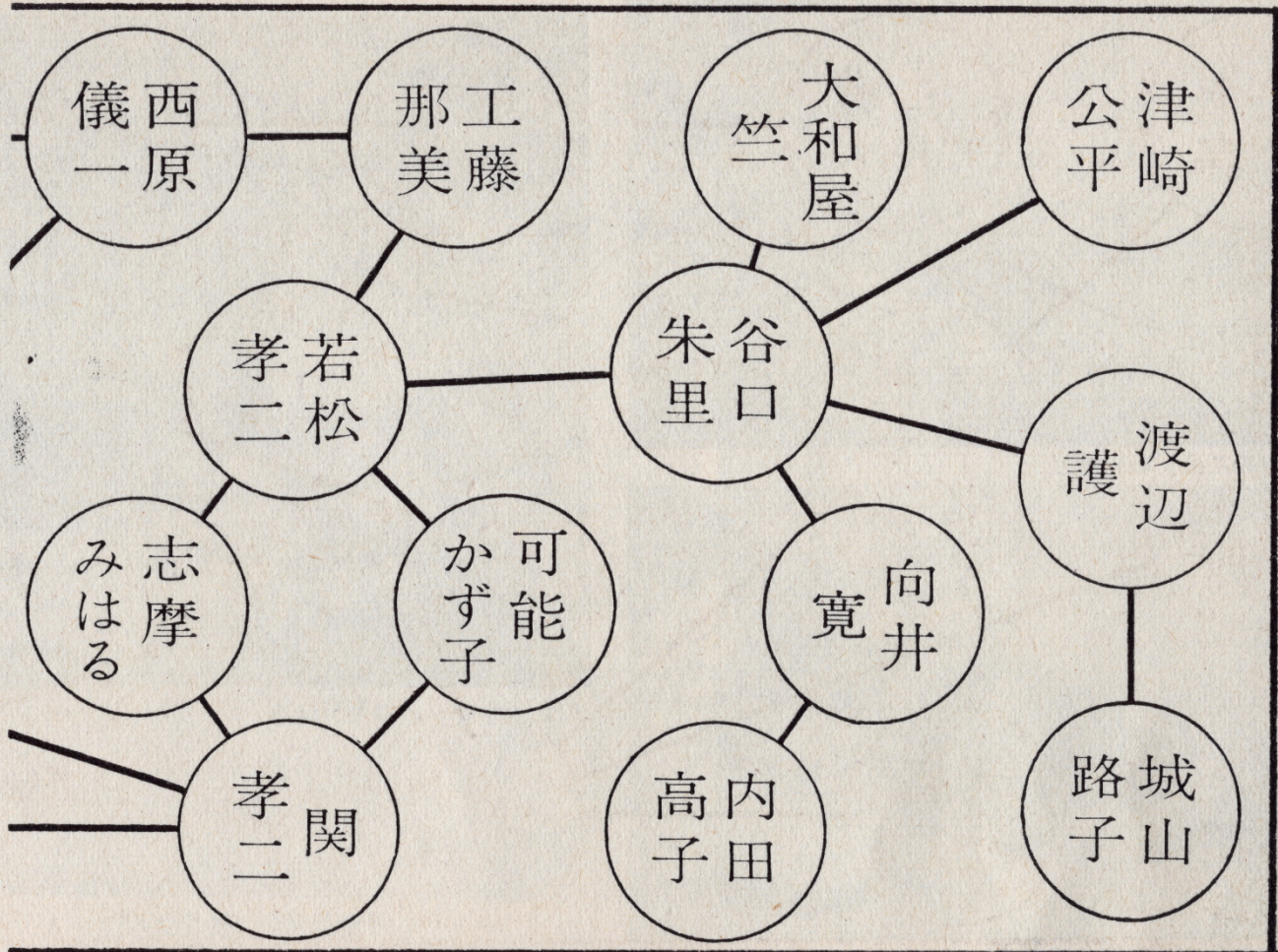
みだれ髪

＝六邦映画配給

▼求め合う男と女の欲望の果て！　松井康子が熱演

愛と憎しみが複雑にからみ合っている人間社会――そこには、またさまざまの醜悪な欲望が渦まいている。映画は四季の美しい風光に恵まれている塩原温泉を背景に、そこに生きる人たちの葛藤を赤裸々に描いた愛欲ドラマ。

秋の昼下がり塩原温泉のある旅館で男（忠司・野上正義）と女（嘉代・松井康子）が激しくからみ合っていた。嘉代のかかりつけの医者川合も、また、飲み屋の女将蔦枝（藤裕子）と愛欲の最中であった しかも蔦枝は忠司とも関係をもっており、嘉代の財産を狙っていたのである。他に清水世津らが出演。監督＝小林悟

ピンク映画スター交友録

尾ヒレはつきもの

この表をまるまる信じてはいけませんゾ。なにしろ芸能界のゴシップなんてものはどこまでが真実かウソかわかったものではないからな。

「単なるボーイフレンドよ」「お手紙だけの相談相手なの」などといっていたスターがパッと結婚式をあげたり、将来を約束していたカップルが、いとも明快に別れたり…これらのケースは数えきれないからね。

どんな人間でも人のウワサには興味をいだき、それを話題のタネにするように、この世の中にゴシップは絶えない。わけても女性がこのゴシップが大好きだ。女性週刊誌の売れるのもそのためなのだ。

ゴシップは生活の中のアクセサリーであり、決して原動力とはならない。

ゴシップは利用せよ

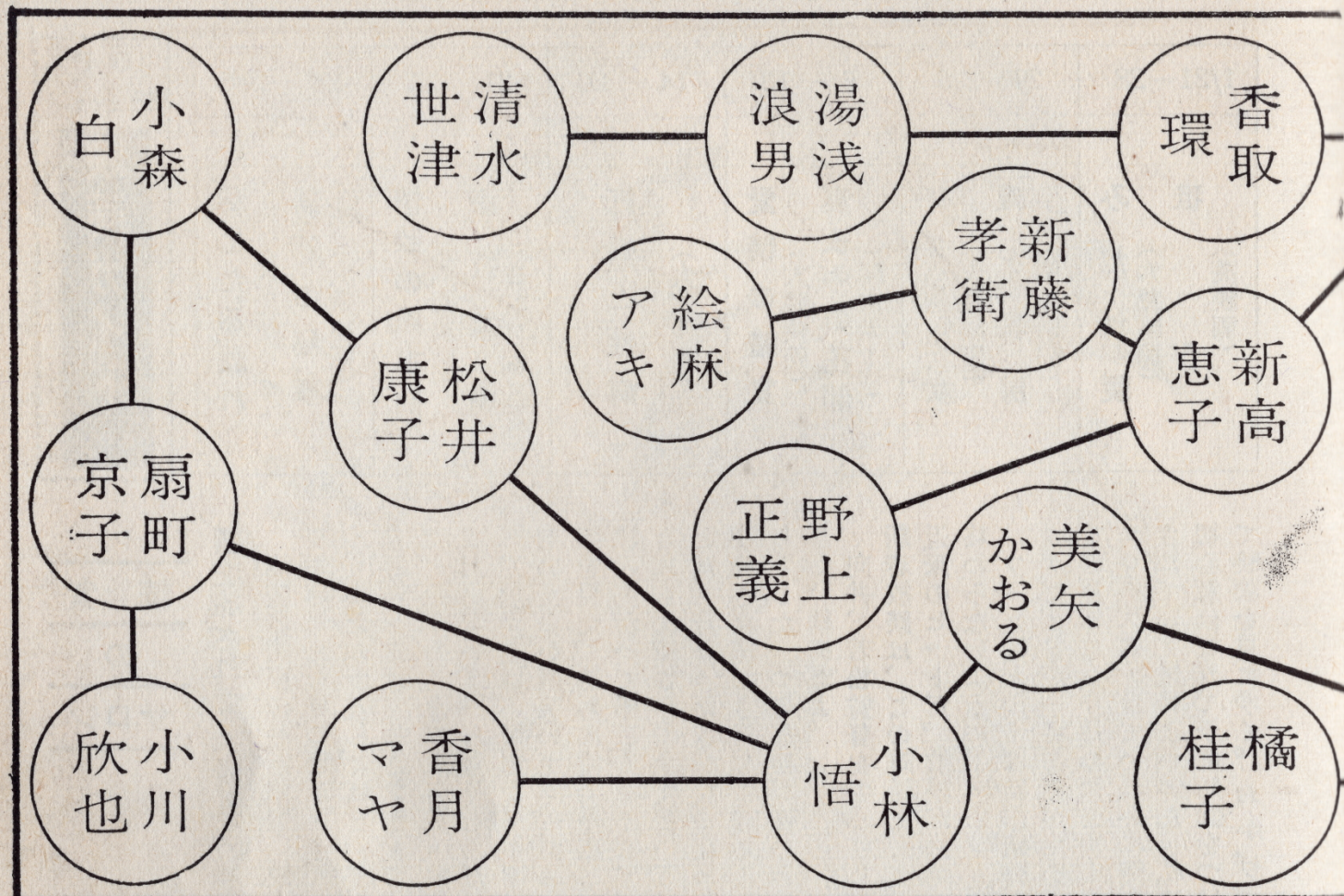
そんなものに〃生活がかかっちゃってるんだー〃と真剣に考える奴こそどうかしている。

アタマのいい奴はゴシップで稼ぐべきである。その手段を心得ているのになると、たとえば先日も売れっ子のハンサム監督向井寛ちゃんと新宿のバーで会ったら内田高子との仲が「できてるそうだね」「かなりの線？」と話題になったもんだ。

「いいさ、いいさ、書きたい奴、いいたい奴はいえばいいよ。逆にボクはそのゴシップを利用しますよ」と向井反論はまことにいさましかった。

コンビはくさいぜ

ピンク映画のプロダクションでは専属をおけるほど豊かじゃない、それが香取環とも

小森白
清水世津
湯浅浪男
香取環
新藤孝衛
絵麻アキ
松井康子
新高恵子
扇町京子
野上正義
美矢かおる
小川欣也
香月マヤ
小林悟
橘桂子

なると葵映画の専属になり、西原儀一社長監督とコンビである。二人はこれまで何本映画を作ってきたろうか。それらを総合判断すると香取と西原監督の仲が？とカンぐることになるわけだ。そのいい例が、新藤兼人監督と乙羽信子のコンビだが、もう古いキャリアだ。

百万ドルのエクボスターだった乙羽信子が演技開眼したのも新藤監督のおかげだから二人の仲は公認の如くになっているんだろうな。

書かれない貧弱さ

しかし、週刊月刊誌をひろげてみて、ピンク映画系のスターや監督のゴシップ記事がほとんど書かれていないことだ。それほど万事が小さくとりあげるほどの〝質的〟なものが少ないからだ。

スケールが小さくチマチマとして質的な発展がみられないからだ。ゴシップとスキャンダルを大幅にひきあげない限り、ピンク映画の飛躍もなかろう。

OPチェーン 映画ガイド

28—3/6	21—27	14—20	6—13	29—2/5	1/21—28
秘めたる戯れ（明光セレクト） 禁断の秘事（大蔵映画）	情欲の黒水仙（六邦映画） 避妊革命（日本シネマ）	妊娠と性病（大蔵映画）	愛情の錯覚（大蔵映画） 真夜中の花園（関東ムービー）	ダブル処女（大蔵映画） 縄と乳房（関東映配）	みだれ髪（六邦映画） 狙う（葵映画）

読者のサロン

■洗練された「成人映画」

池袋名画座のもぎりで「成人映画14号」を見つけたとき「おっ、出たね」と私はほとんどときの声をあげて雑誌を摑んでいた。毎週行くたびに「成人映画まだ出ない？」ときくもんだから、いつもは不愛想なモギリ嬢もいくらか薄笑いを浮べて私の顔を見た。待ちに待った感じで読み終わって感じることは、イカにも洗練されてきたということだ。野暮ったさがなくなって小粋きな感じさえして、ちんまりとした一つの風格が備わってきた。結構だよ。

向井、若松監督を中心にした新春放談は、この雑誌としては近来のヒットだ。放談が砲弾に終わらないように。

ファンにとっては新作紹介とロケだよりが一番ありがたい。その意味で「今月のスクリーンエロチズム」はていねいに紹介されていて気持よかった。私達初心者はこれで予備知識をつけて映画を見にゆく。おかげで近ごろは男優の俳優までおぼえた。（東京板橋・坪井道弥）

■製作者に熱意を感じない

14号拝見した。最初のころは危なっかしくて気楽な気持で見ることができなかったが、最近は安定し気楽に見ることができます。編集部諸兄姉のご努力が誌面に表われてうれしくなる。

最近の成人映画はどうも見にゆく気がしない。初期のような熱気が感じられないし、題名と内容の必然性が全くなく観にいって裏切られることが多い。観客をバカにするなといいたい。テレビ、映画畑の人が偽名を使って撮っているのが多いとか。〃家族や娘に知れると困るので〃と聞くがなにいってやがるんだといいたい。そんな無責任さだから成人映画はいつになってもいいものができないのだ。（浦和市・岡登久夫）

■編集室■

★監督たちばかりタバになって俳優たちをコテンパンにやりこめるのは手落ちじゃない！と抗議がきた。それじゃ一つというので、嚙みつき座談会の二回目を開くことになった。なんとも勇ましいのなんの、こんどは監督と一緒に会費制でチョイチョイやりたいわあーなどと、よき欲求不満の場ともなったようだ討論し、触発し合って向上することは大切なことだ。（X）

★きびしいさむさから解放されるのももうすぐだ。暗い映画館よりも明るい外でレジャーを求める季節もやってくる。おもしろい映画でファンの足をひくだけの作品群が果して揃っているだろうか。（I）

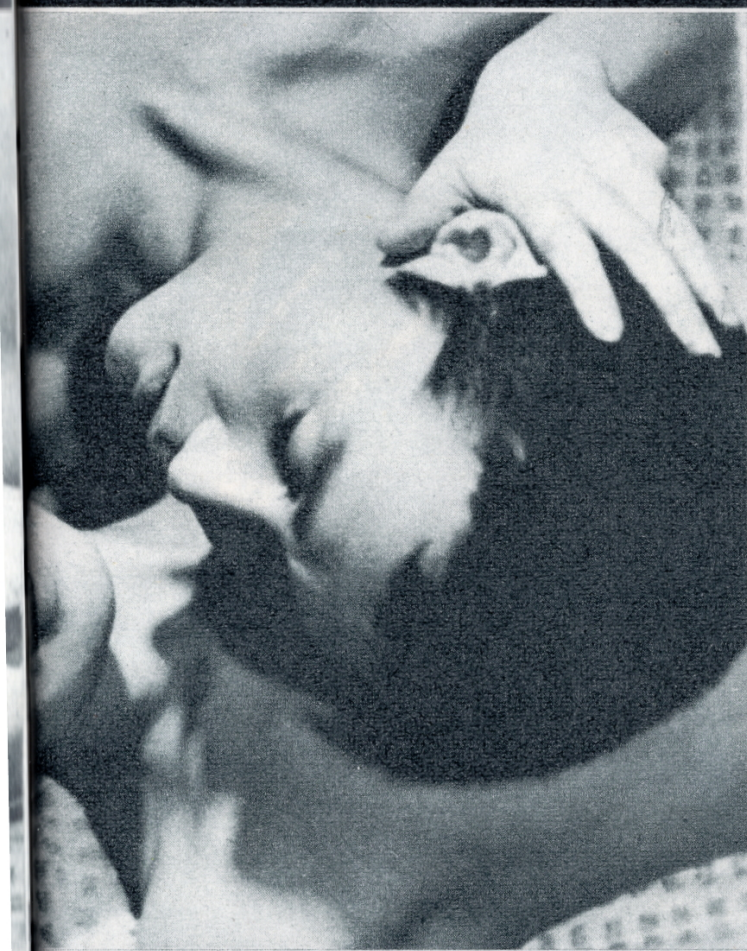
★ゴールデン・アロー賞（雑誌芸能記者クラブ）の授賞パーティーの会場はすごく花やかだった。こちらも今年は「成人映画賞」でも設けて、いい仕事をした人たちに賞をあげたいと思う。（K）

成人映画

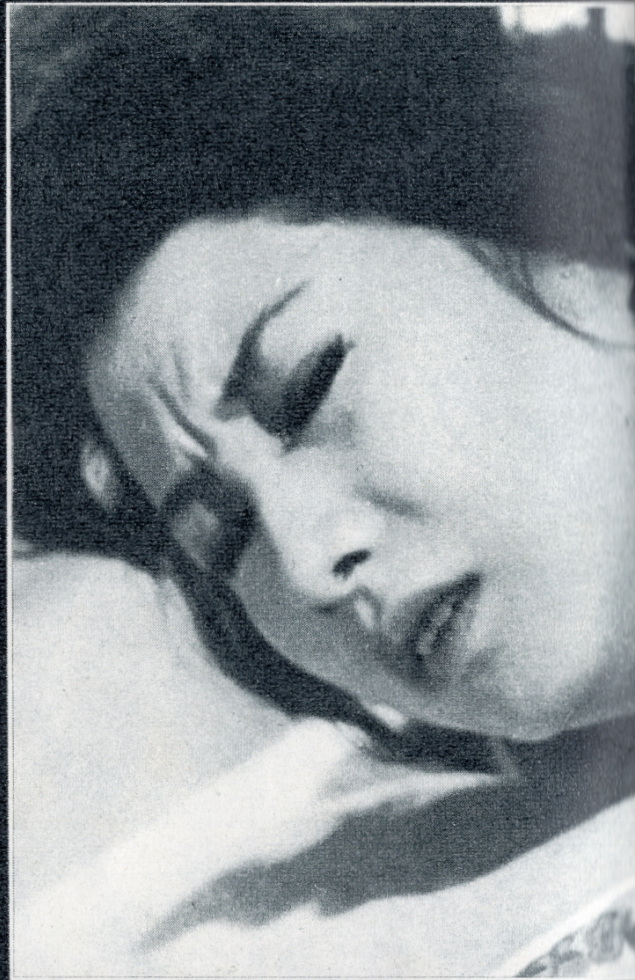
■昭和42年2月1日発行　通巻第15号　毎月1回1日発行　編集兼発行人／川島のぶ子　発行所／東京都中央区銀座西8—10　高速道路ビル地下101号室　現代工房　電話／東京（571）6400　■定価百円

スクリーンエロチシズム ＝その2＝

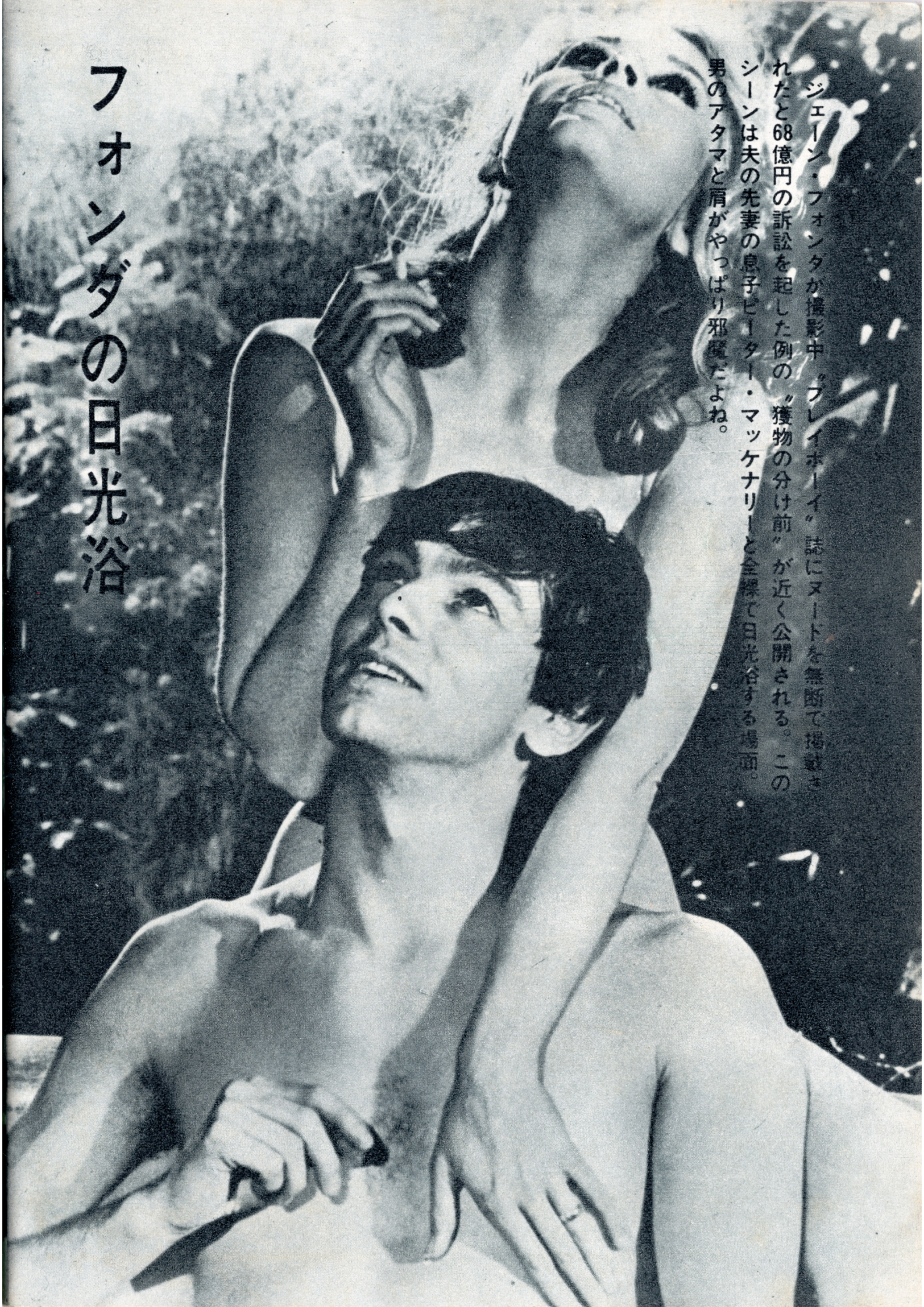
「真夜中の花園」の成瀬恵子

「媚薬の罠」の美矢かおる➡

「媚薬の罠」の桂 奈美

⬆「みだれ髪」の松井康子

⬇「縄と乳房」の斎藤道代

「愛情開眠」の新高恵子

フォンダの日光浴

ジェーン・フォンダが撮影中〝プレイボーイ〟誌にヌードを無断で掲載されたと68億円の訴訟を起した例の〝獲物の分け前〟が近く公開される。このシーンは夫の先妻の息子ピーター・マッケナリーと全裸で日光浴する場面。男のアタマと肩がやっぱり邪魔だよね。

関東地区成人映画上映館一覧表

大阪地区成人映画上映館

難　波

▶千日前オリオン座
(641) 5477

▶千日前新オリオン座
(641) 5477

西淀川区

▶野里リボン座
(471) 1082

阿倍野筋

▶阿倍野名画座
(641) 5885

福島区

▶吉本キネマ
(451) 6793

布施市

▶布施映劇
(721) 4990

城東区

▶放出シネマ
(961) 0664

守口市

▶守口セントラル
(991) 0049

東淀川区

▶十三若草劇場
(301) 5929

天王寺区

▶鶴橋松竹
(761) 9752

都島区

▶都島会館
(951) 4651

北　区

▶天六映画劇場
(351) 9138

大阪駅

名古屋地区成人映画上映館

○浄心ハイツ
(531) 4118

○上飯田劇場
(991) 5714

○守山瓢映
0560-(79) 2082

○栄生グランド劇場
(551) 6379

○タカラ劇場
(941) 6076

○堀川映画劇場
(231) 0193

◎今池フジ
(731) 4763

○太閤劇場
(551) 2353

◎テアトル希望
(541) 3044

○曙文化劇場
(731) 3806

◎日活シネマ
(241) 2345

○鶴舞劇場
(881) 8494

◎名画座
(231) 3211

○雁道劇場
(881) 8069

○日比野東映
(671) 0407

○八熊文化劇場
(321) 8194

◎南映画劇場
(811) 4906

○新郊劇場
(811) 2730

○名港文化劇場
(661) 1269

○名南劇場
(811) 6586

月刊「成人映画」通巻第十五号 昭和42年2月1日発行 編集兼発行人 川島のぶ子 発行所／東京都中央区銀座西八ノ一〇 高速道路ビル国映センター一〇一号室 電話（五七一）六四〇〇 現代工房 定価百円